

成年
コミック

ANGEL COMICS
ACTION PIZAZZ BRAND

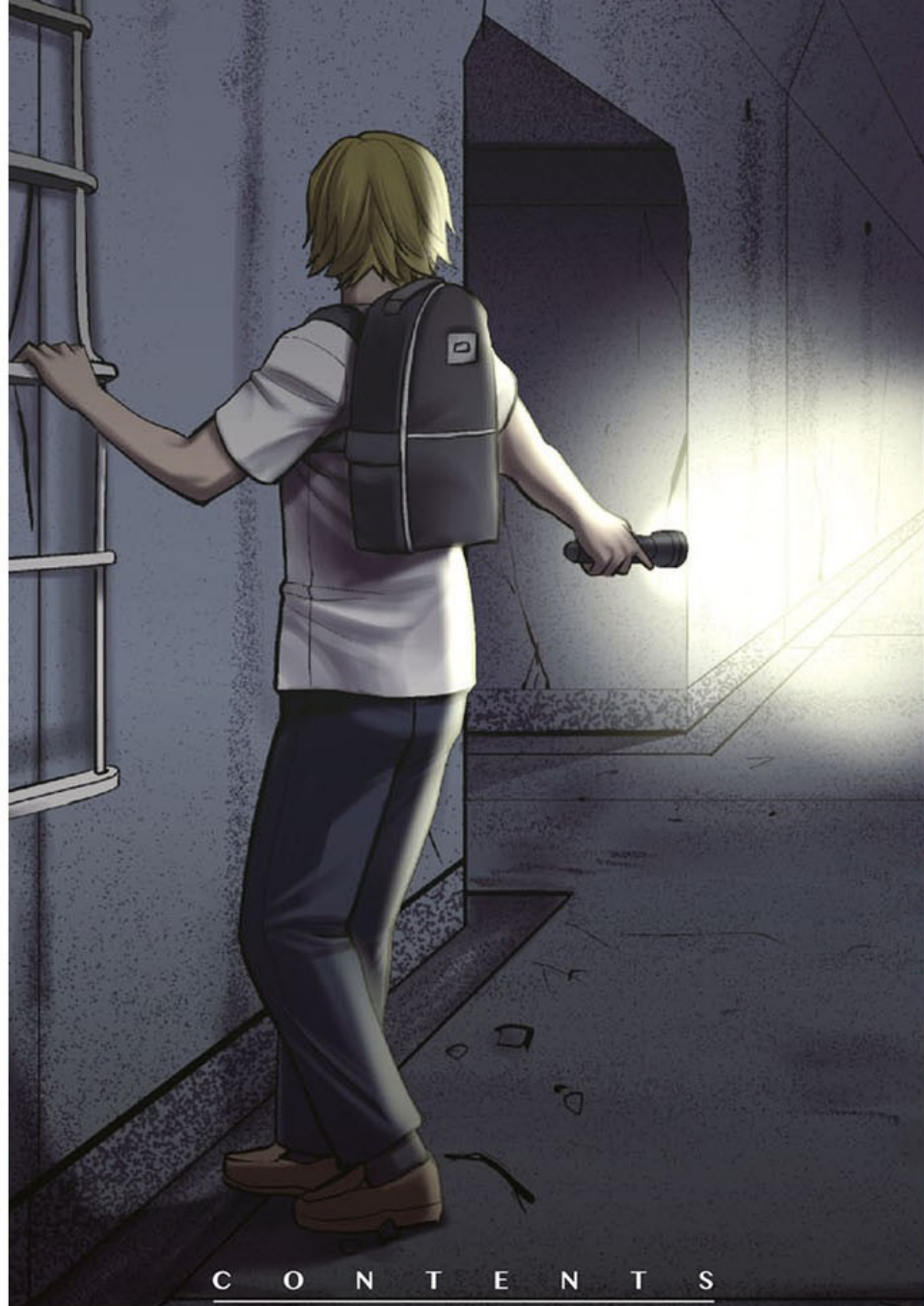
地下30mの 蜜月を...

Honeymoon
at 30 meters
underground

彩画堂

Presented by SAIGADO





C O N T E N T S

第1話 食器棚の裏……………3

第2話 奈落への入り口……………23

第3話 イサカ……………43

第4話 女医……………63

第5話 地下道……………83

第6話 自室……………103

第7話 泉……………123

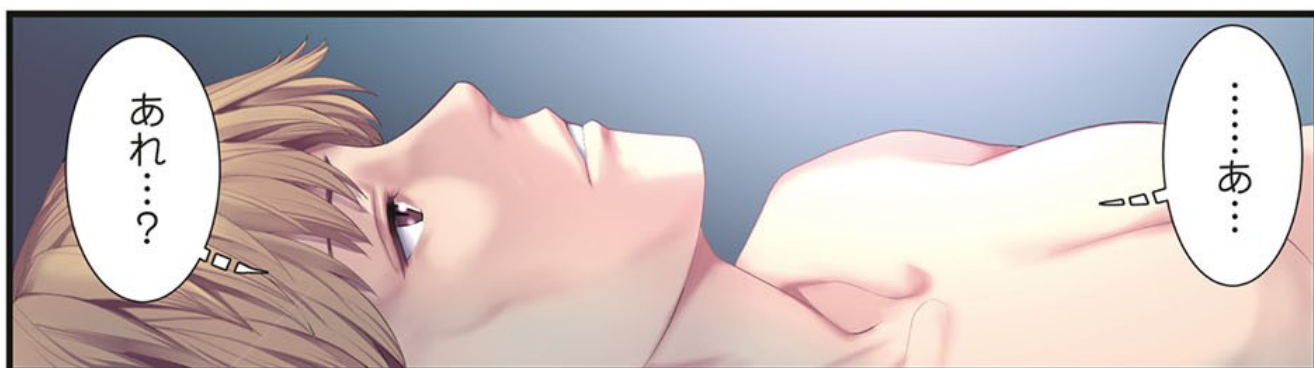
第8話 生存者……………143

第9話 外界……………163



うっ…

う…



あれ…?

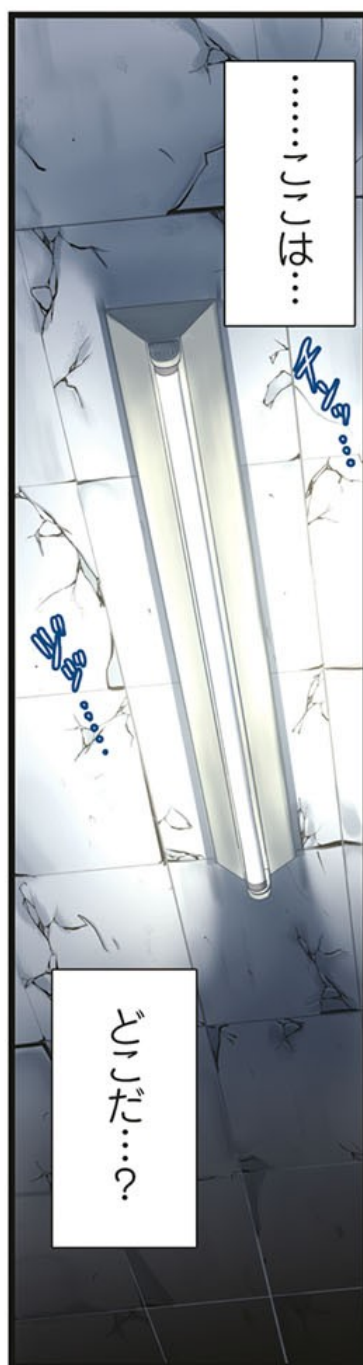
…あ…



それに…

この少女は…

誰だ…? *



……ここは…

どこだ…?

ああっ…

ああ……

それに…
俺は…

ほまれ
誉…
いい…

何をして
いるんだ…?

なぜ
彼女は…

俺の名前を
知ってる…?

ああ…

頭が
ぼんやり
して…

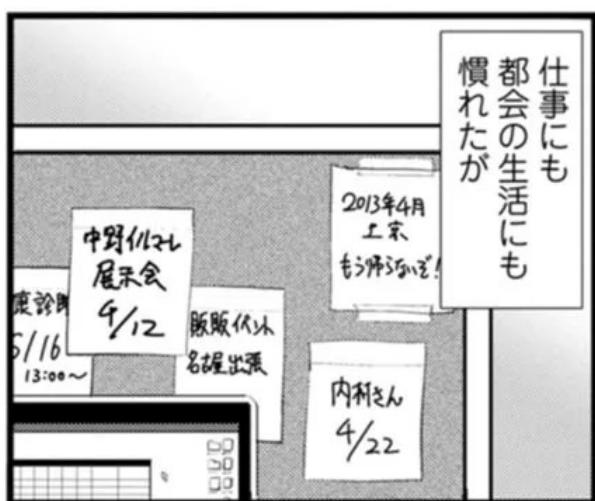
でも…

なんて
気持ちいい
んだ……











キラキラ
眩しかった

田舎にいた
頃は…

テレビに映る
東京が…



おつかれ

お先に



だけど
現実

そう甘い
ものじゃ
なかった…



この街に来れば
何でも叶うと

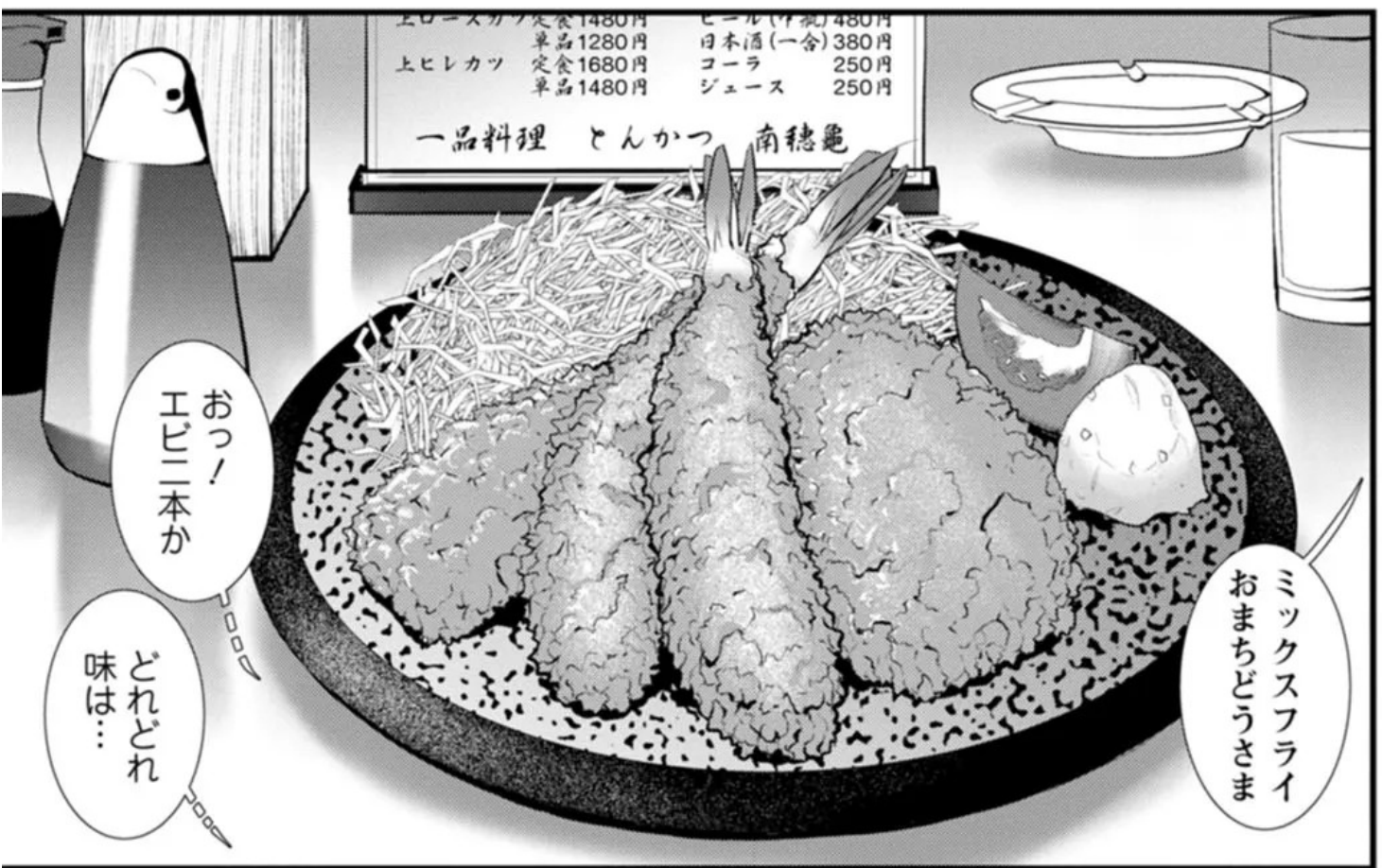
無邪気に
考えていた



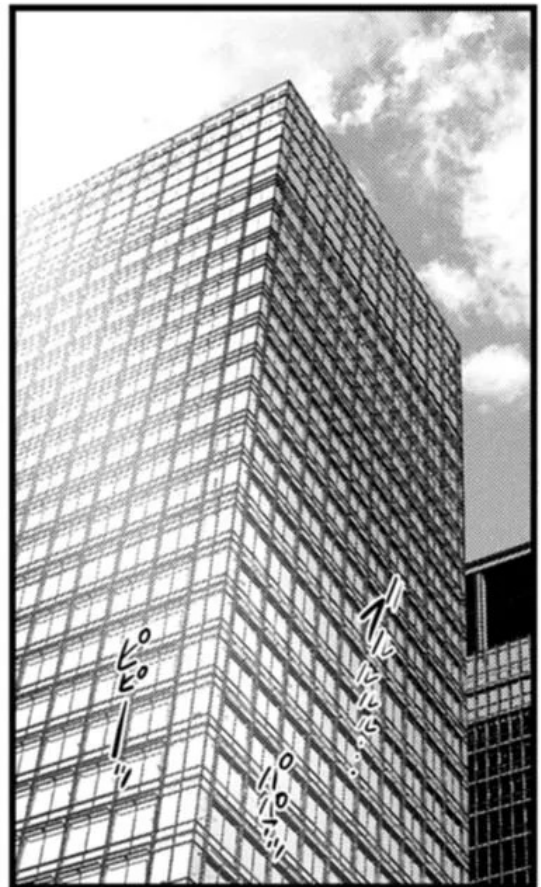
誰もが
食うために
働き

働くために
食う生活を
送っている

そんな現実を
突きつけられた











普段なら…

大して気にも
留めずに…

そのまま寝て
しまっただろう

しかしその日は
酒の勢いと…

響の帰郷の
件もあって…

ズ
ト
ッ

うっ！
やっぱり
ここか

すげえ
匂いだ…

ま……
まさか……

死体でも
埋まってる
んじゃない……

……
隙間……？

ズ
ト
ッ

ズ
ト
ッ



気づいた時には
この場所で…

この少女ど
行為に及んで
いた……

奇妙だ…

じっと
見つめられ
ていると…

吸い込まれて
いきそうに
なる……



わからない…

わからないが…
彼女の目を

見つめては
いけない気が
する…





あ…
あは…

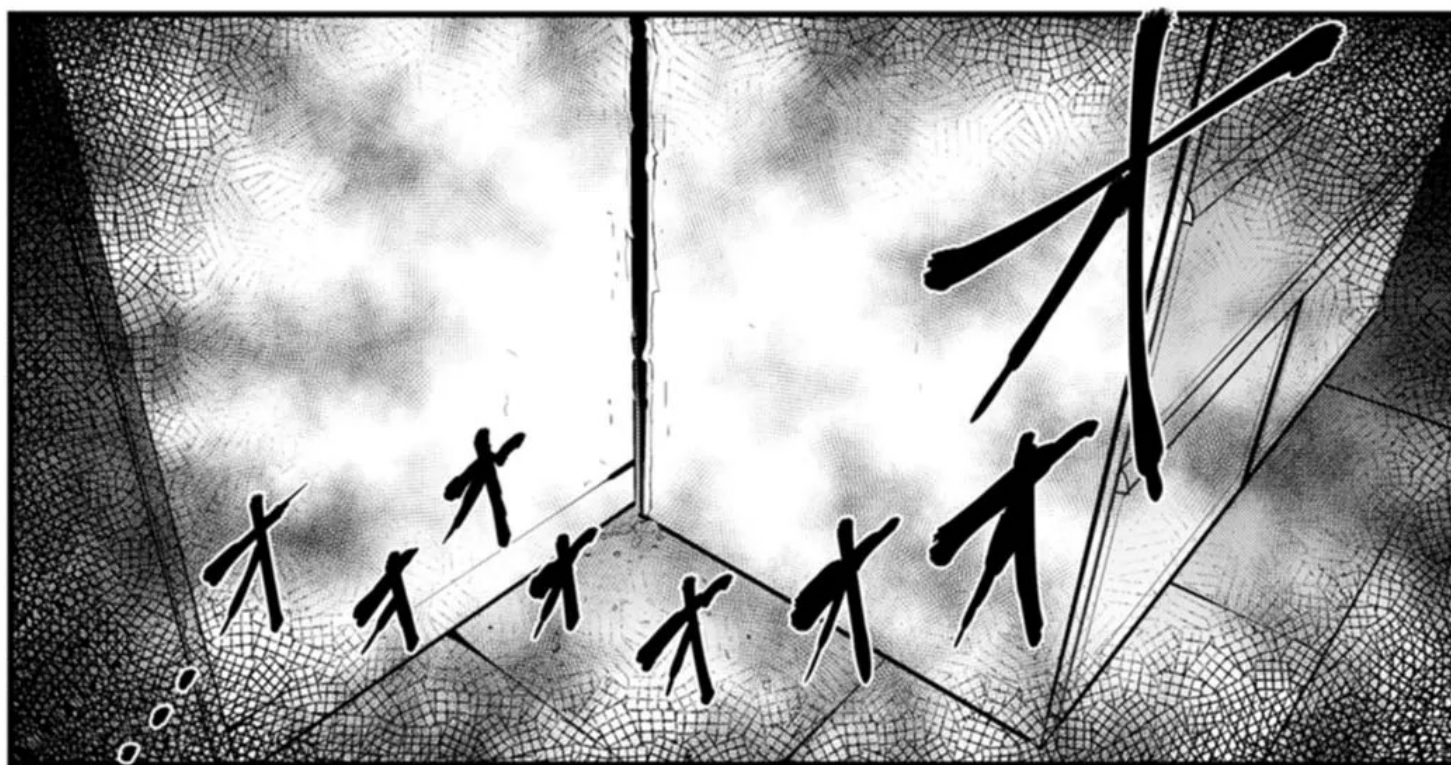
ああ…
あん…っ

…俺は

何をやって
いるんだろう…？









日本人の
ようにも
見えるし…

違う
ようにも
見える…



細いしなやかな
肢体に触れると

ひんやりと
していた



その少女は…

不思議な
雰囲気
を
湛えていた…



全ては
俺があの
食器棚を…

動かした
ことから
始まった…



俺はその
少女と…

全く
現実感の
ないまま…

セックスに
溺れた…



俺はあの
台所に行くのが
怖くなり

朝食も取らず

逃げるように
出社した



まるで喉に
詰め物を
された如く

いらつ
しゃーい

食欲は
失せていた



ふう…

とにかく
食わないと

仕事に
ならない
しな…



しかし
その日は…

肉も魚も
食べる気が
しなかった



春菊とごぼう天
そばです

普段
この店では

肉そばと
イカ天が
俺の好みだ





やれやれ…

今時PCも
使えない奴が
部長ねえ…

まあそう
言うなって

部長の営業で
懇意になった
取引先は多い
んだぜ

デイスカウントの
ダイマートも
そうだし

大手ホームセンの
京葉ディーアイや
プラボーホームや
コーサンとかな

マジ？

見かけに
依らない
もんだなあ

まあ部長職は
論功行賞って
やつさ

こんな…

いつもと
変わらぬ
日常が…

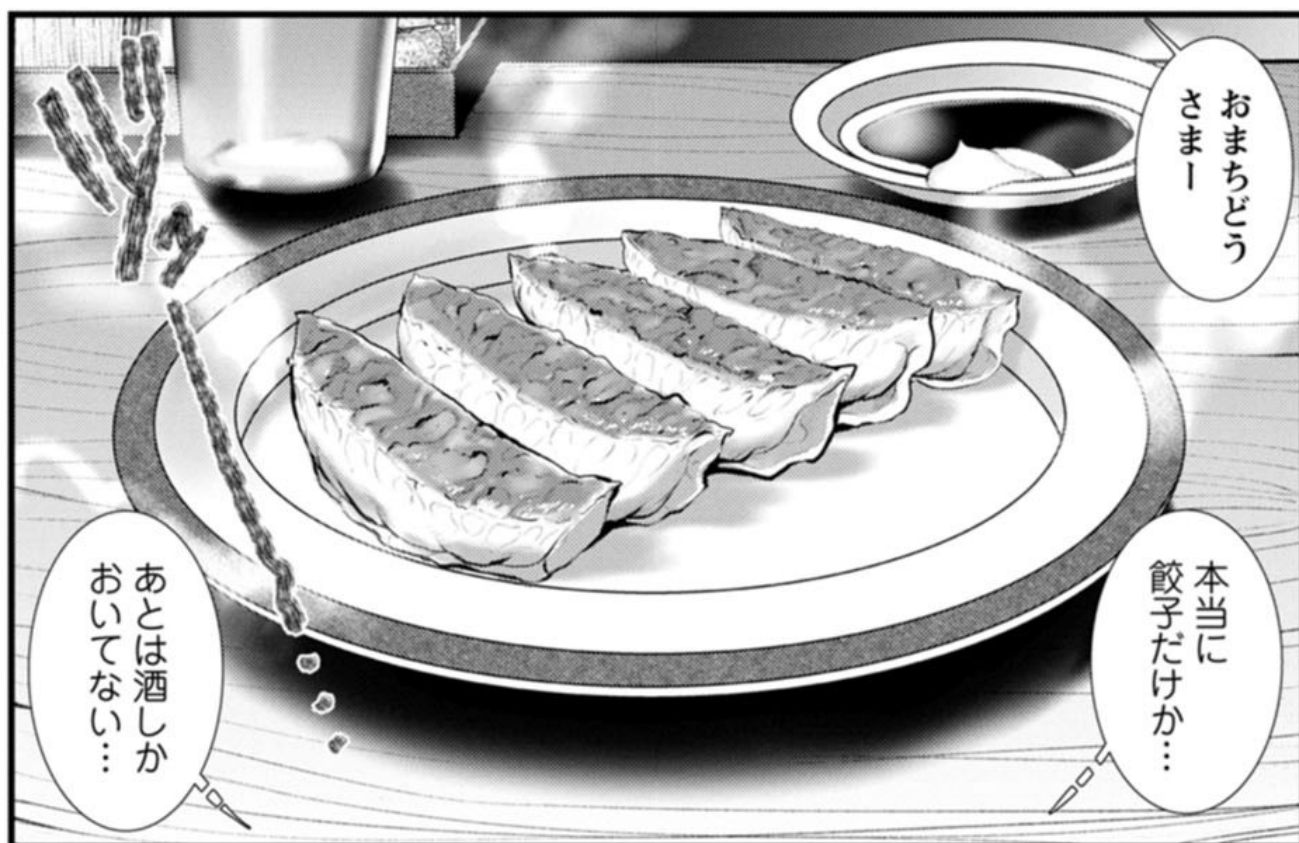
今日の俺には
何とも心地よい

だが
それでも…

あの
食器棚の
ことが…

時々頭を
よぎる…









そして
俺は…

彼女に求め
られるまま…

どこかも
わからない
部屋の中で

彼女と
関係を持った

俺はなぜか
疑う事も…

問うことも
ないまま…

お願い…
私…

あなたと…

セックス
したい…

性器に
むしゃぶり
つく…

彼女の姿を
眺めていた



俺は言われる
ままに…

彼女を
力いっぱい
組み敷いて…

あッ！あ…
ああ…



仄かな淡桃色の
小さい秘裂に

欲望に猛った
赤黒い性器を
押し込んだ

俺はそれが
夢か現実かも
わからぬまま

彼女の体を
狂ったように
貪った…

跡切れの
跡切れの
記憶が…

少しずつ
蘇ってくる…

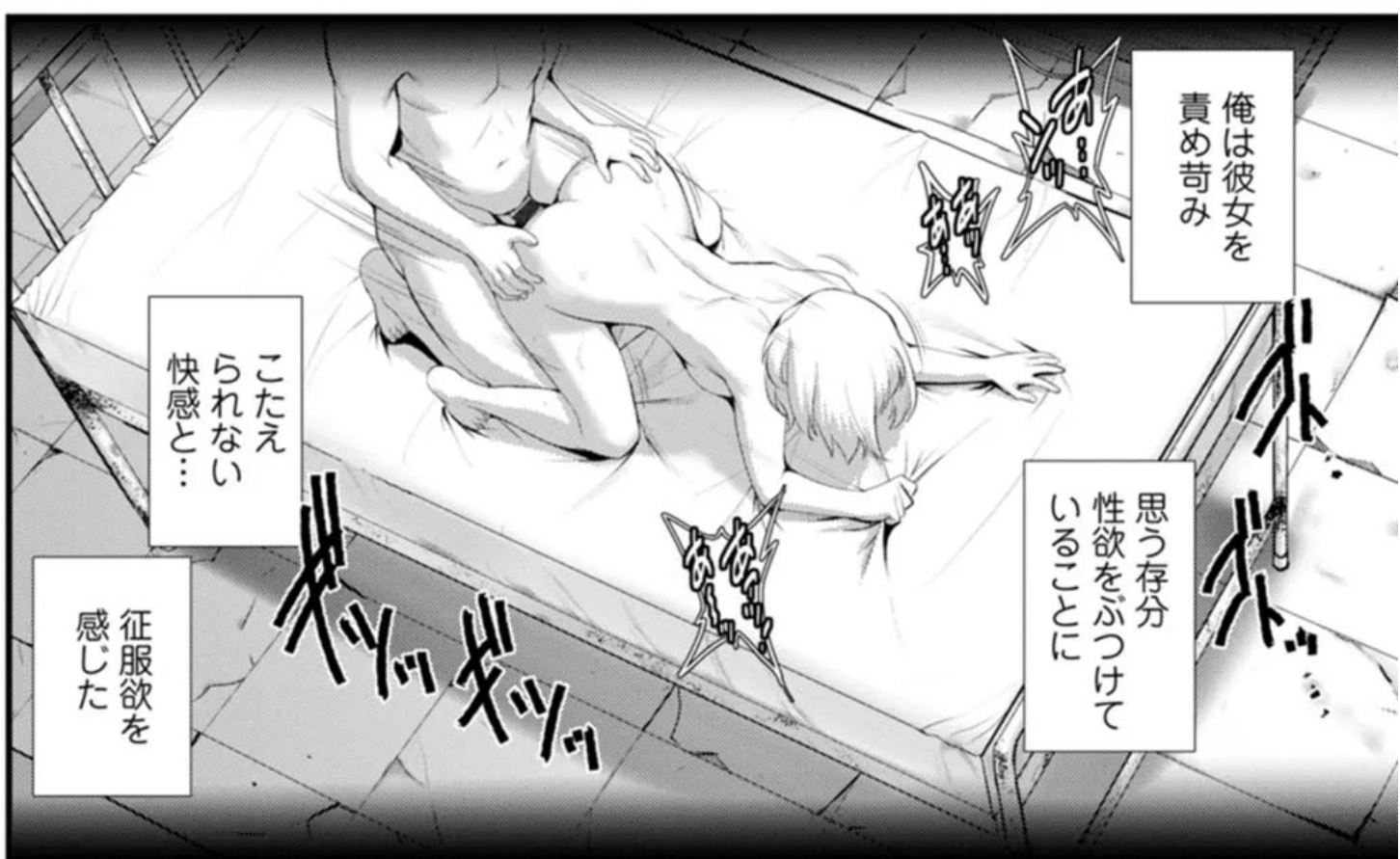


その言葉に
甘えるように



いいよ...
もっと...

好きにして
いいから...



俺は彼女を
責め苛み

思う存分
性欲をぶつけて
いることに

こたえ
られない
快感と...

征服欲を
感じた

グッ グッ



彼女の体を
貪っている
うちに...

奇妙な感覚に
襲われた



はあつ
はあつ
はあつ...

はあ...
はあ...



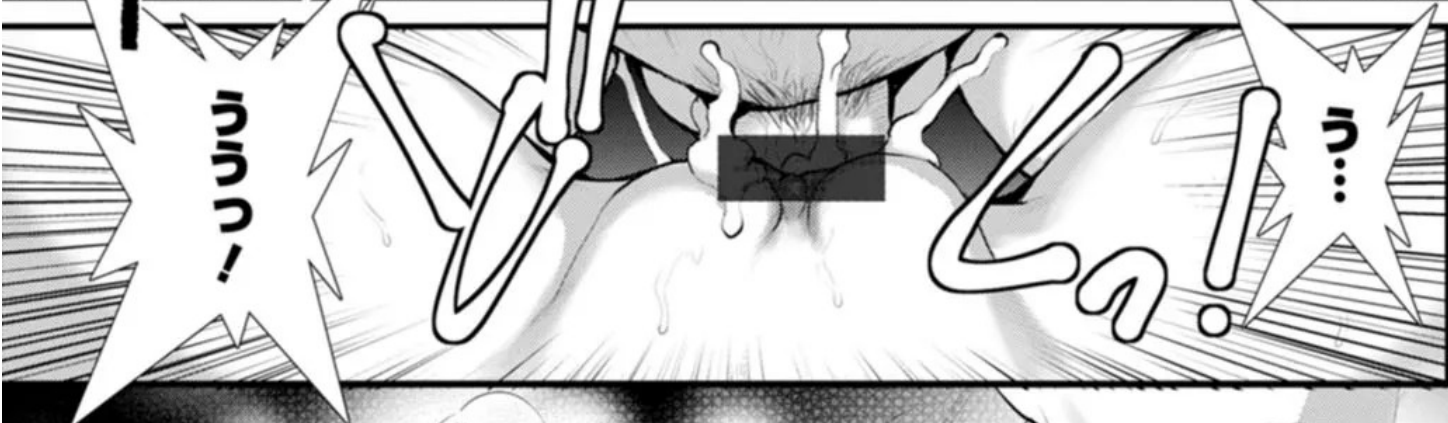
...ちがう...

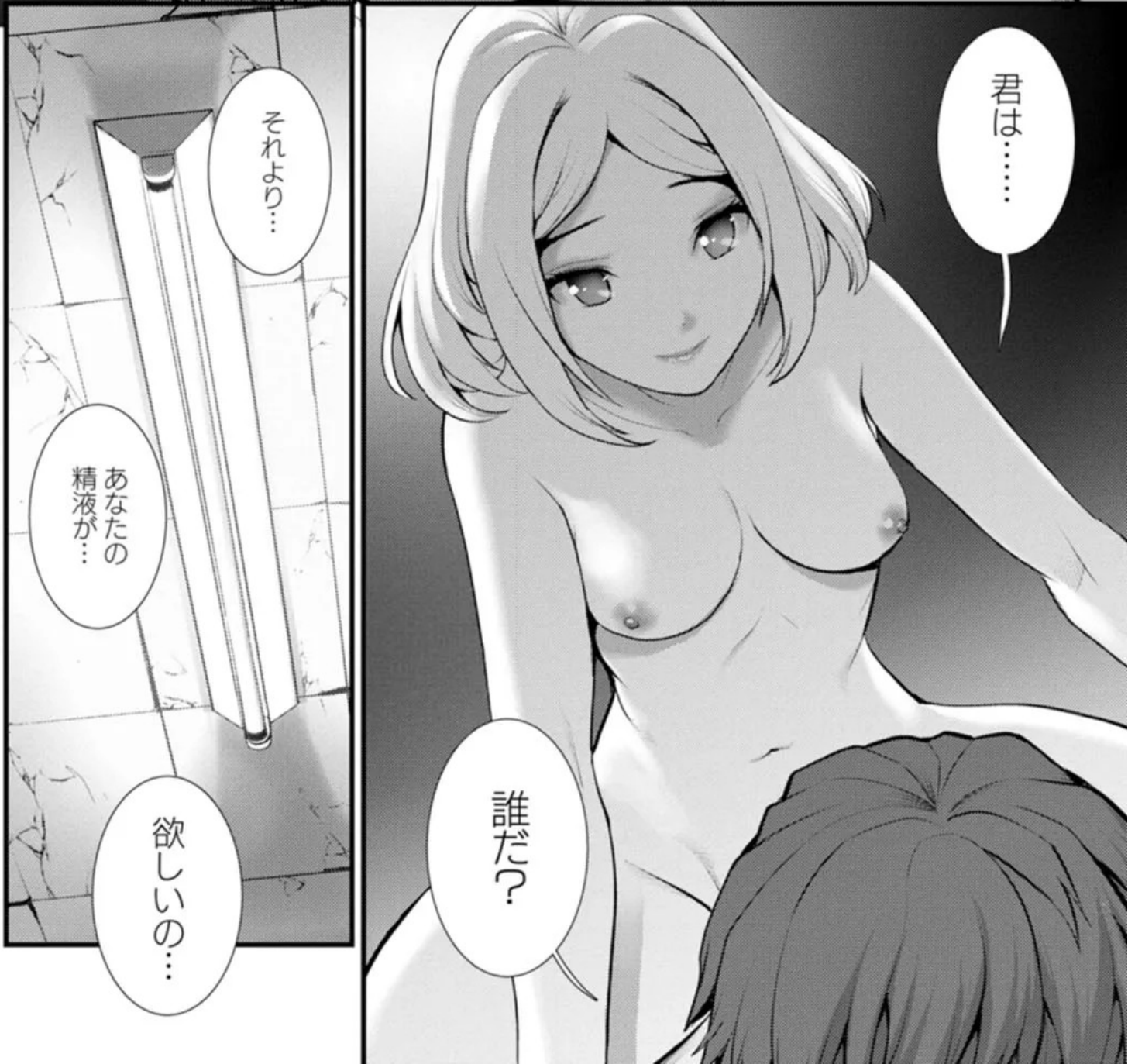
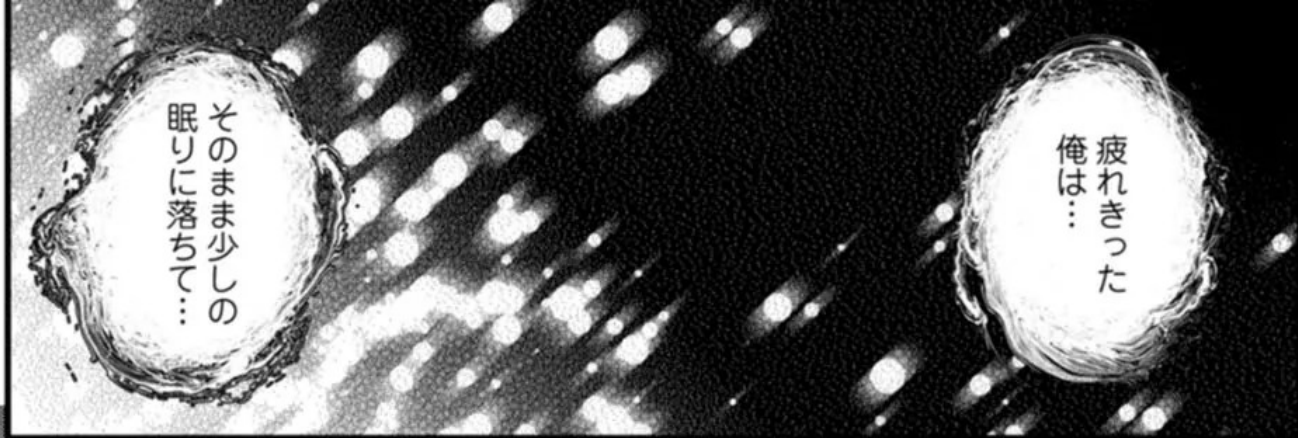


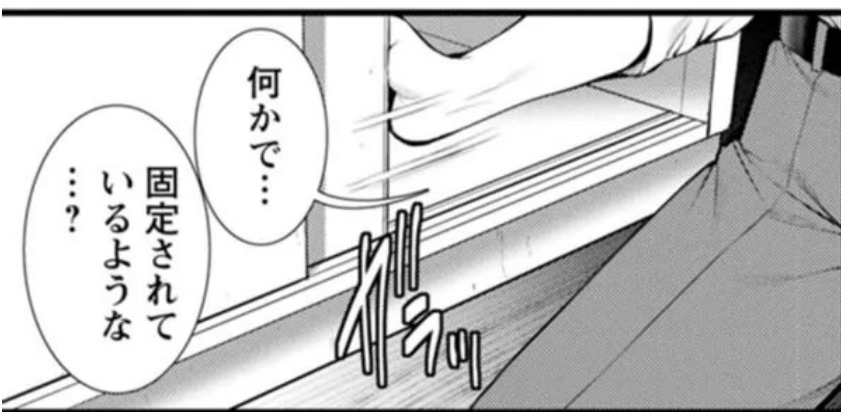
俺が責めて
いるんじゃ
ない...

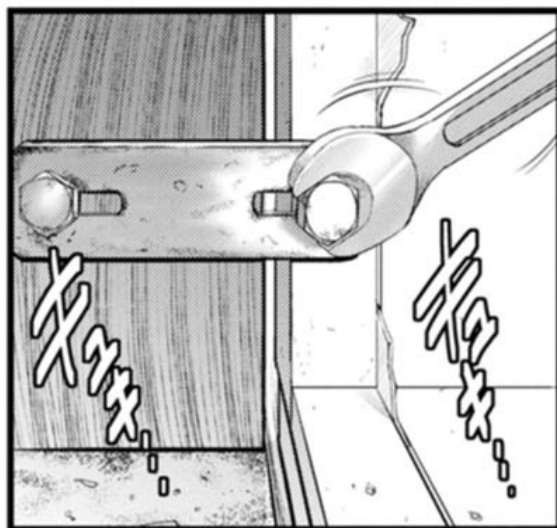
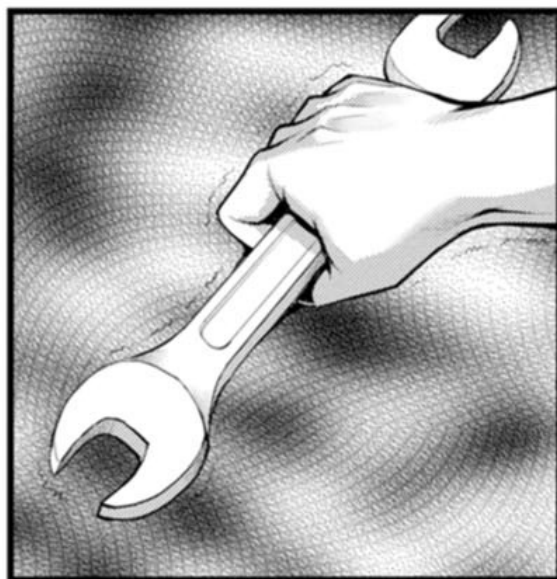
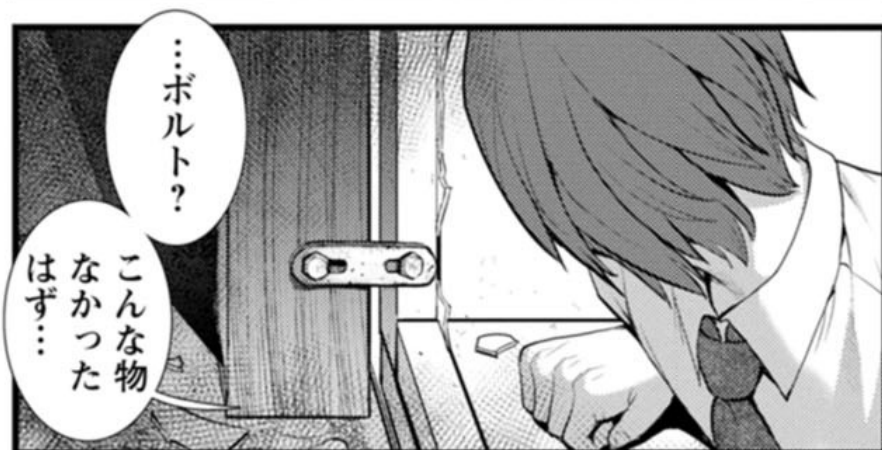
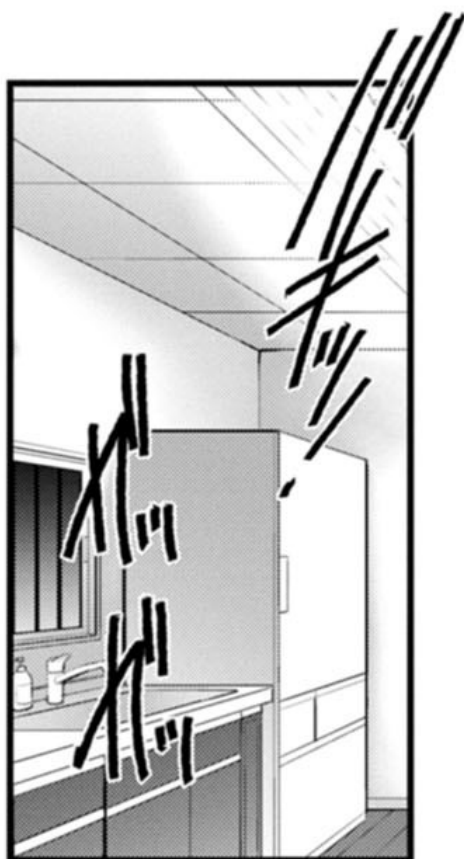
...いや
俺は...

むしろ
俺が...







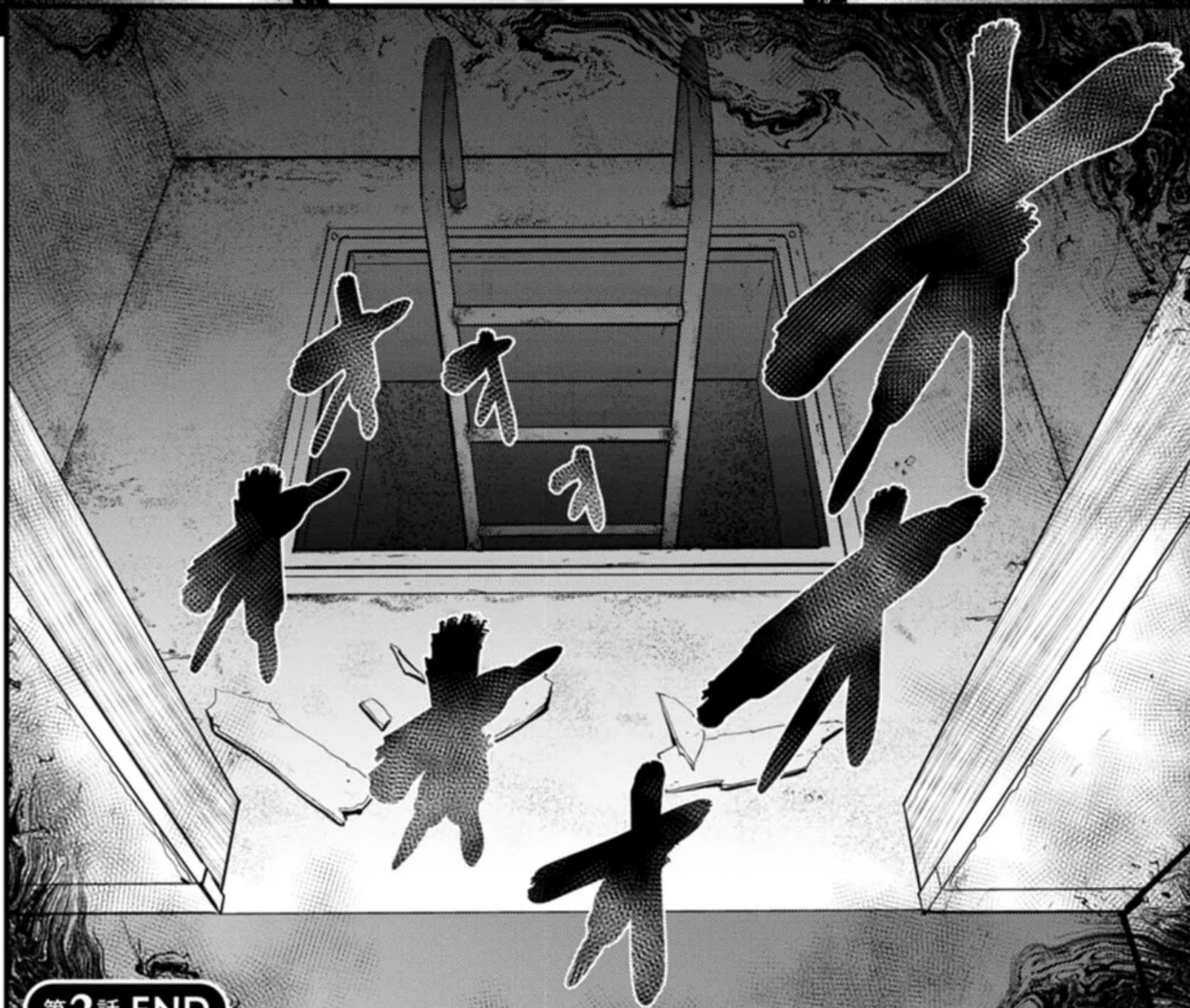


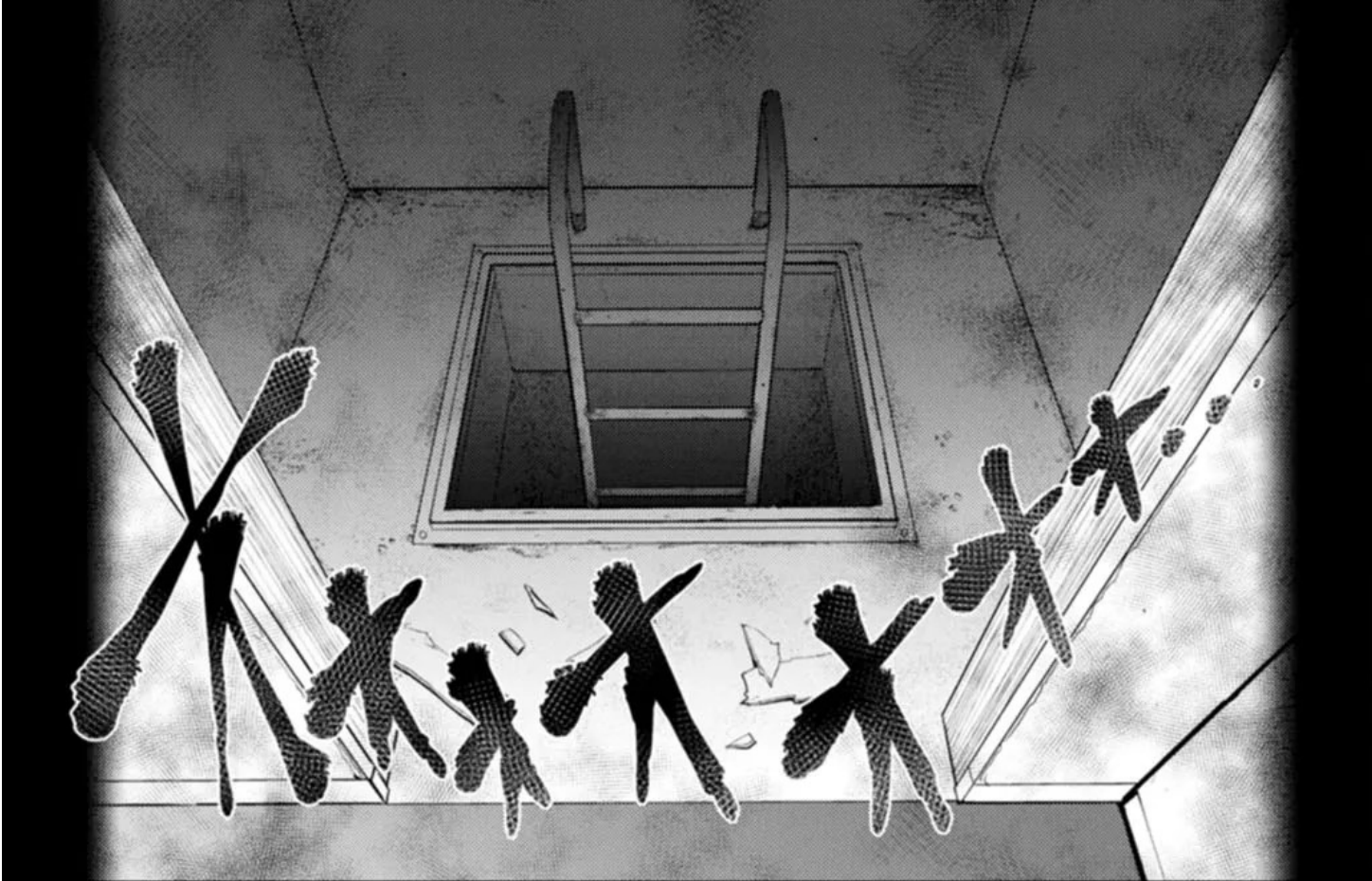
この奥には

—間違いない

誰かがいる!







深いな…

まだ
続くのか…

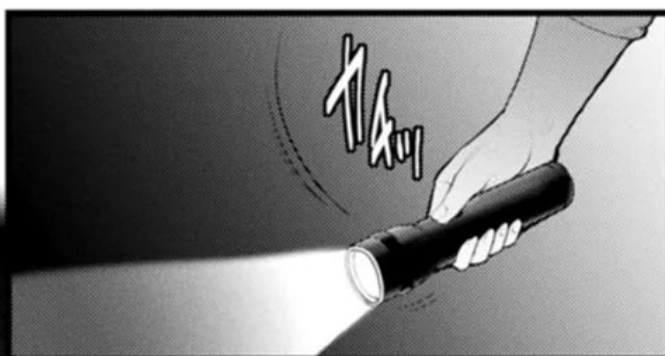
うう…

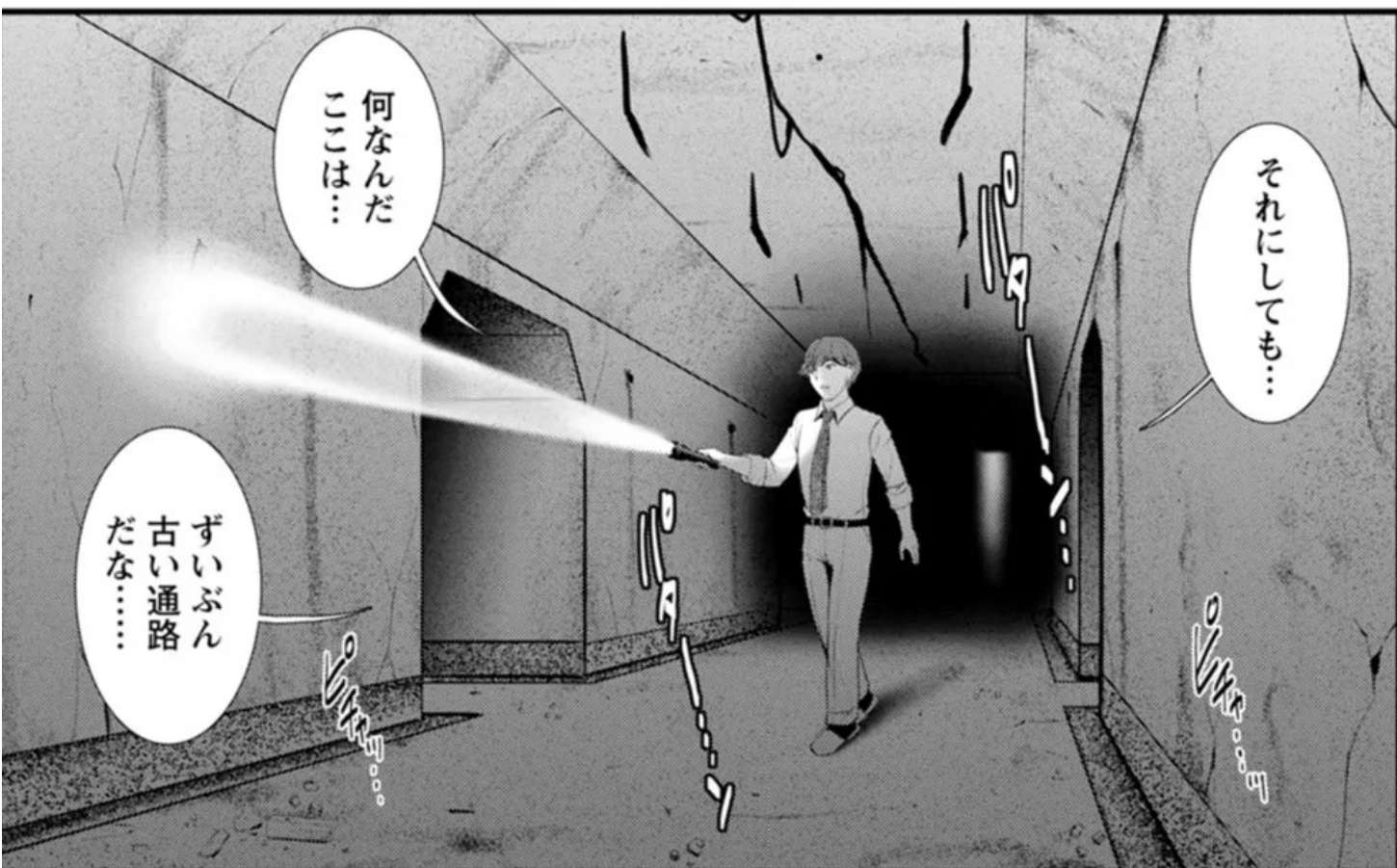
く…

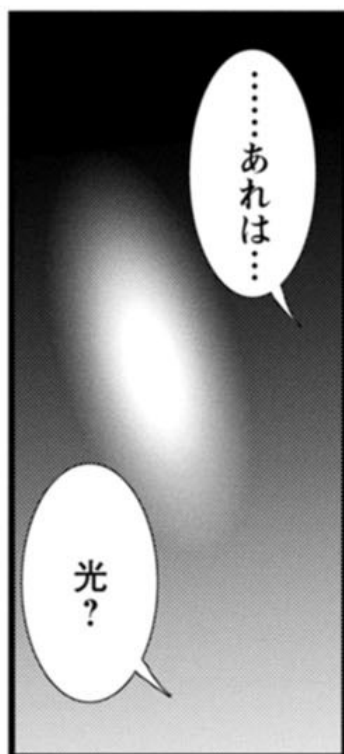
くそ…っ
うう…

ぐっ！











…やっぱり…

夢じゃ
なかった
んだな…

よかった

あの人の
注射で…

死んじゃった
と思ってた

イサカ…
だったよな？

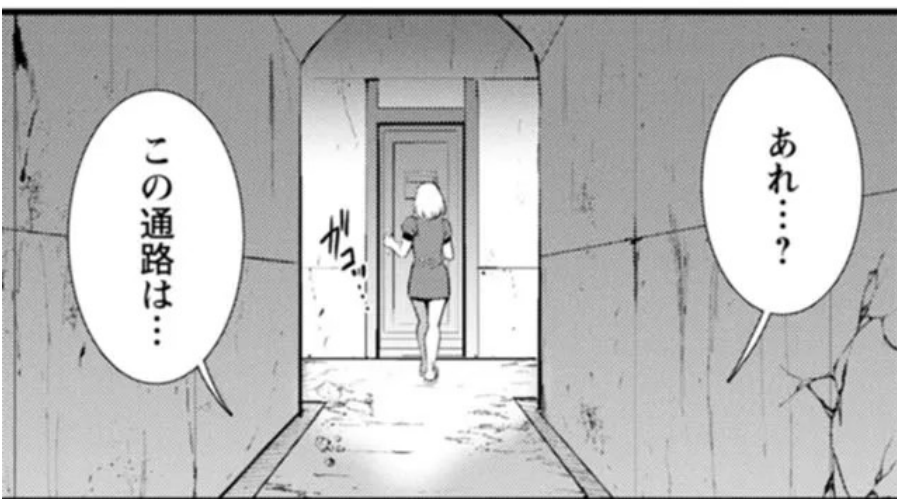
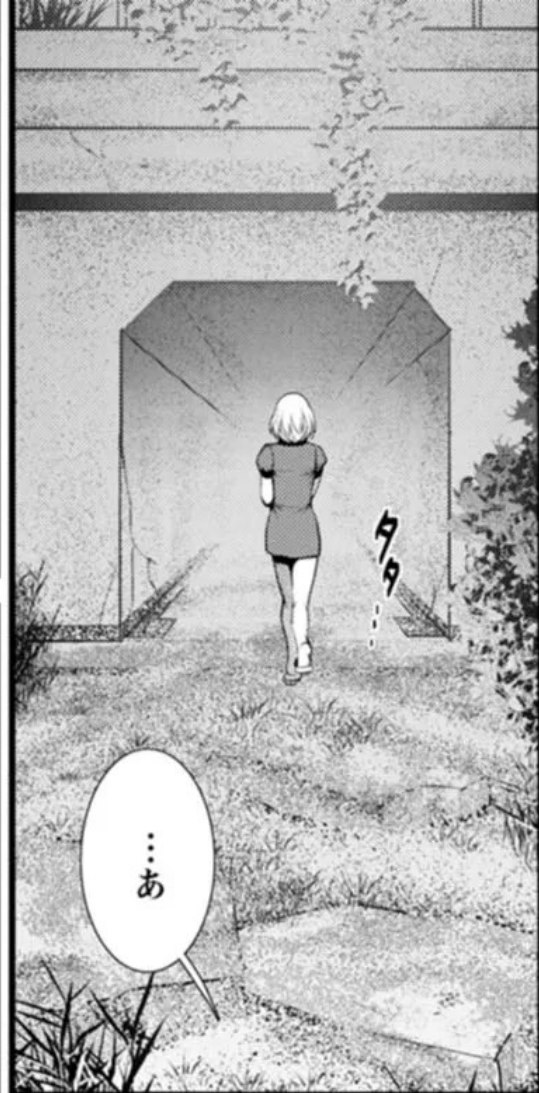
ここは一体
何なんだ？

知らない

私もあの人に
連れて来ら
れただけ

…あの人がって？

ふふっ…







いつも
私は…

独りぼっち…



だから…

あなたと
また出会えて

本当に
うれしい…



誉…

また…

私を抱いて…

お願い
誉…

あなたの
精液が…

欲しいの…



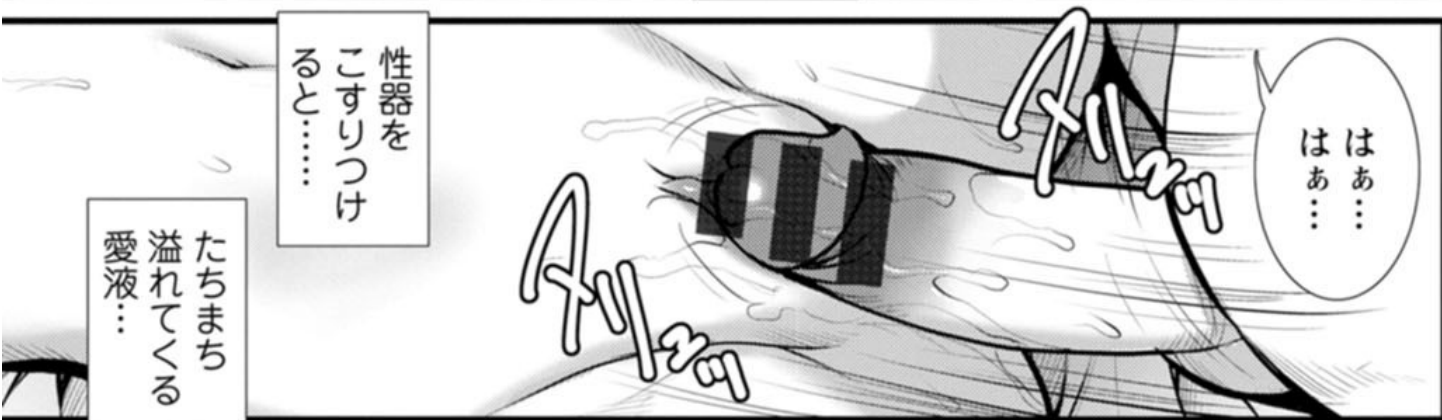


彼女の
薄桃色の
性器に...

欲情を
覚えずには
いられない

彼女の胸は
どこまでも
柔らかく

握ると
あっか
圧潰しそ
うなほ
どだ



はあ...
はあ...

性器を
こすりつ
けると...

たちまち
溢れてく
る愛液...

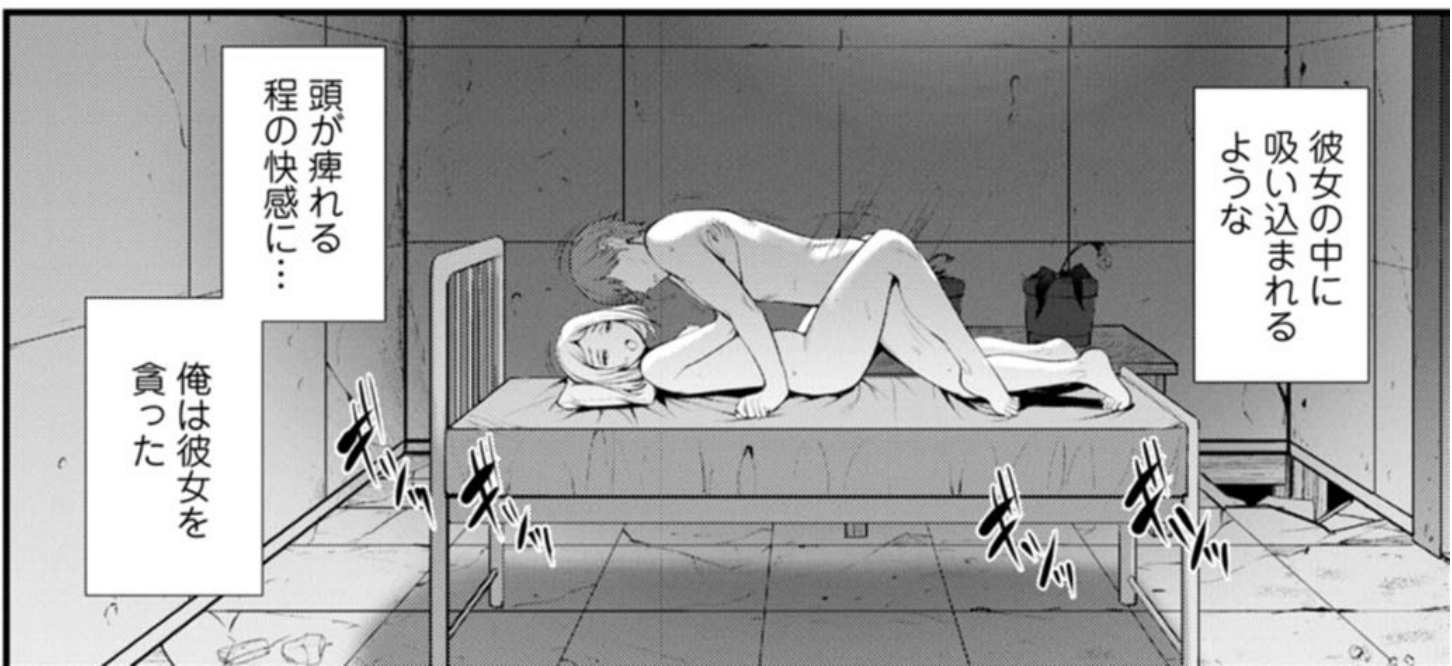


だが
不思議な
ほどに...

彼女からは
何の匂いも
感じられず

部屋の中に
妙に漂う

消毒薬の
匂いだけ
が気にな
った





彼女の
被虐的で
潤んだ瞳に

俺は興奮を
隠せなかった



上から
力一杯
押さえつけ

粘膜のこすれ
あう快感に
酔いしれる



はあ...はあ...
はあっ...

あっ...
うっ...く

ああっ...
ああ...う

従順に
自らの
脚を開き

俺の性器を
受け入れる
彼女に...

彼女を支配
したような
愉悦を感じた...

んうっ！
ん…ん！

彼女を己の
意のままに
犯す愉悦…

あの時と
同じだ…

んふっ！んっ
んっんっ…

…なのに…

何なんだ…？

あの時と
同じ…

この奇妙な
違和感は…

俺は彼女を
支配している

そう思えば
思っほど…

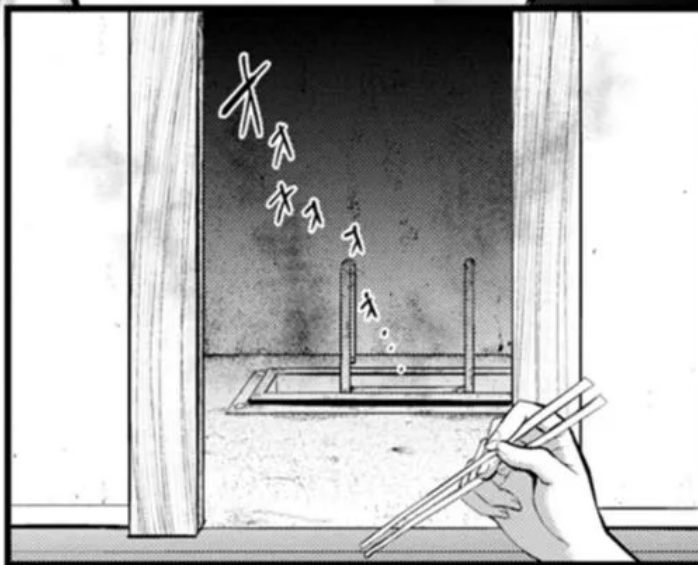
逆に彼女に
飲みこまれて
いくような

そんな感覚を
覚えずには
いられない





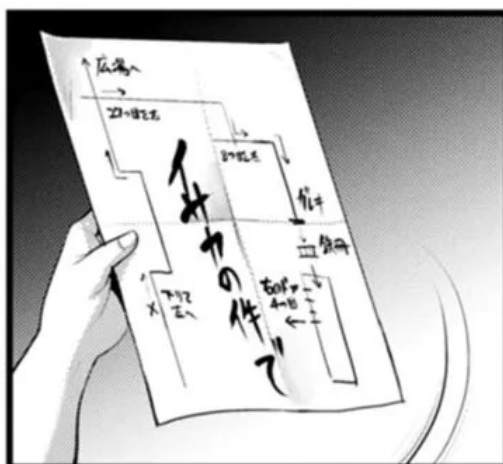




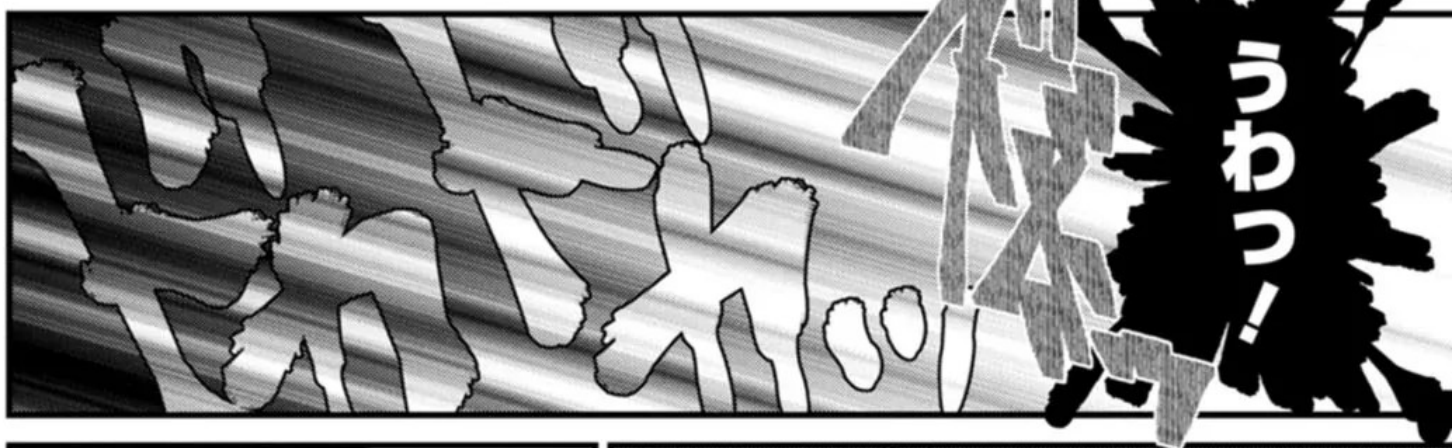












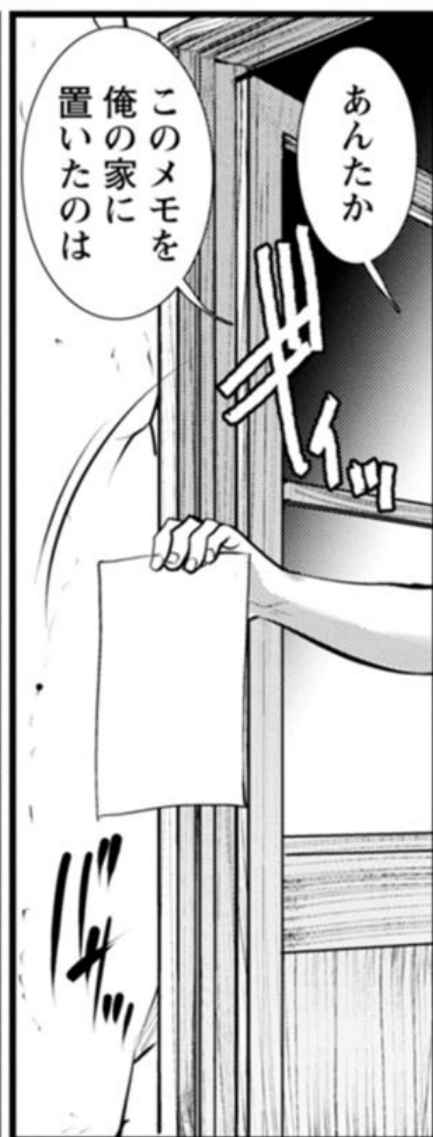


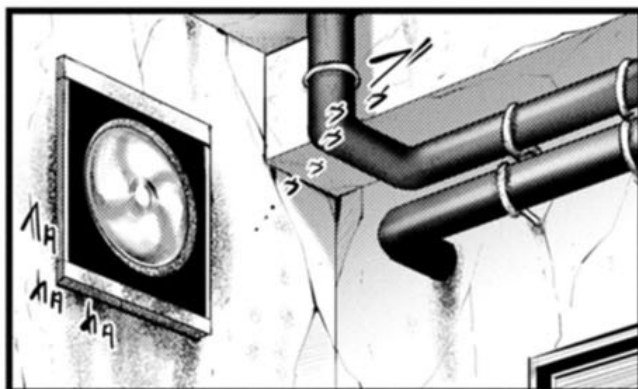
.....
な

なんだよ
ここ...

どういう
ことだよ...?









な…何の
ことだ…？

とぼけても
無駄よ

あの子から
何度も性行為を
求められ

それに
応じた
でしょ？



…ああ

あれが…

イサカの
病氣って
ことか？



なら
教えて欲しい

この
地下道は

一体
何なんだ？



…まあ
そんなところ

だから私が
あの子を

この地下道に
隔離しているの



ええ

あんたは
その地下道
を使って

俺の家に
勝手に入り
してたのか





気がつけば…

あの子に
拘こもって
いる間に…

37になって
しまった…

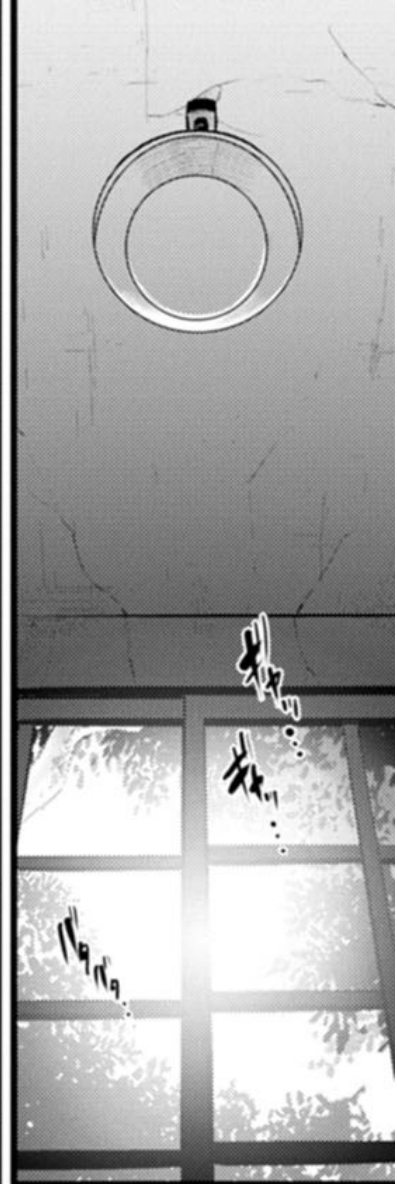
女として
取り返しの
つかない年月を

あの子に
費やして
しまった…

だから
お願い…

女としての
人生を…

少しだけ
取り返さ
せて…





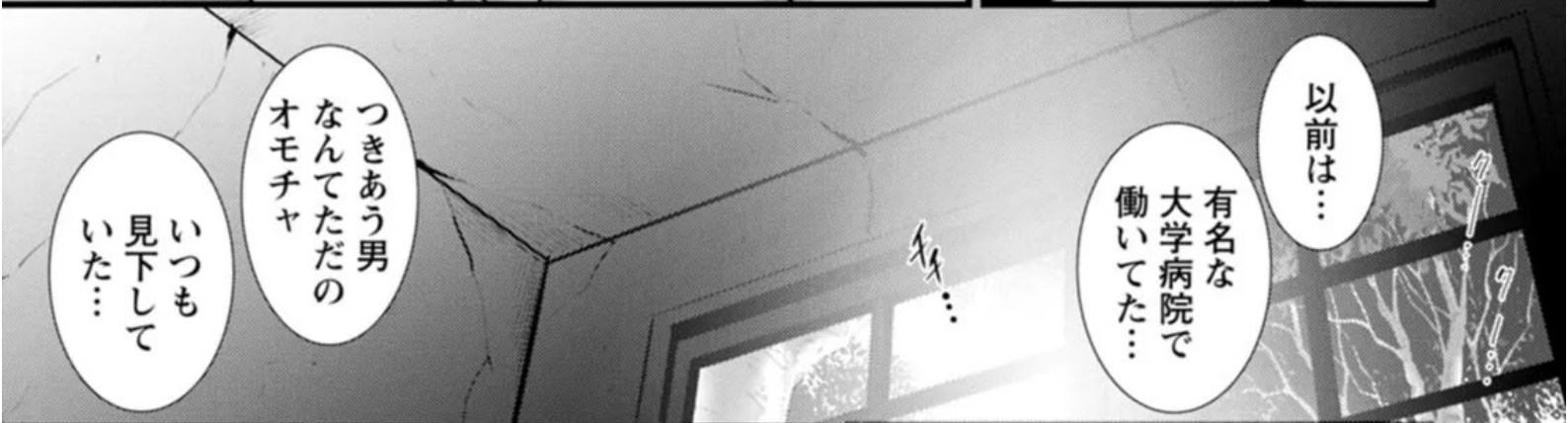
かわにしあや
川西綾…

…私は
綾…



俺は…

なかしまはまれ
中島誉…



以前は…

有名な
大学病院で
働いてた…

つきあう男
なんてただの
オモチャ

いつも
見下して
いた…



病院を
辞めざるを
得なくなつて

すっかり
落ちぶれ
果てた…

そして
気がついたら

もう女と
しても終わり
かけている



なのに…

あの子に
関わった
ばかりに…





あつ…あつ
あつあ…つ

あつ…
いいッ…
いいわ…ッ

はあつ
はあつ…

あ…
あ…
あ…

お…おつ
おお…つ

おつ…おおつ
犯してっ…

もっと…
お…おほつ



一体彼女の
人生に…

何が
あったのか…



イサカが
彼女の人生を…

なぜ狂わせて
しまったのか

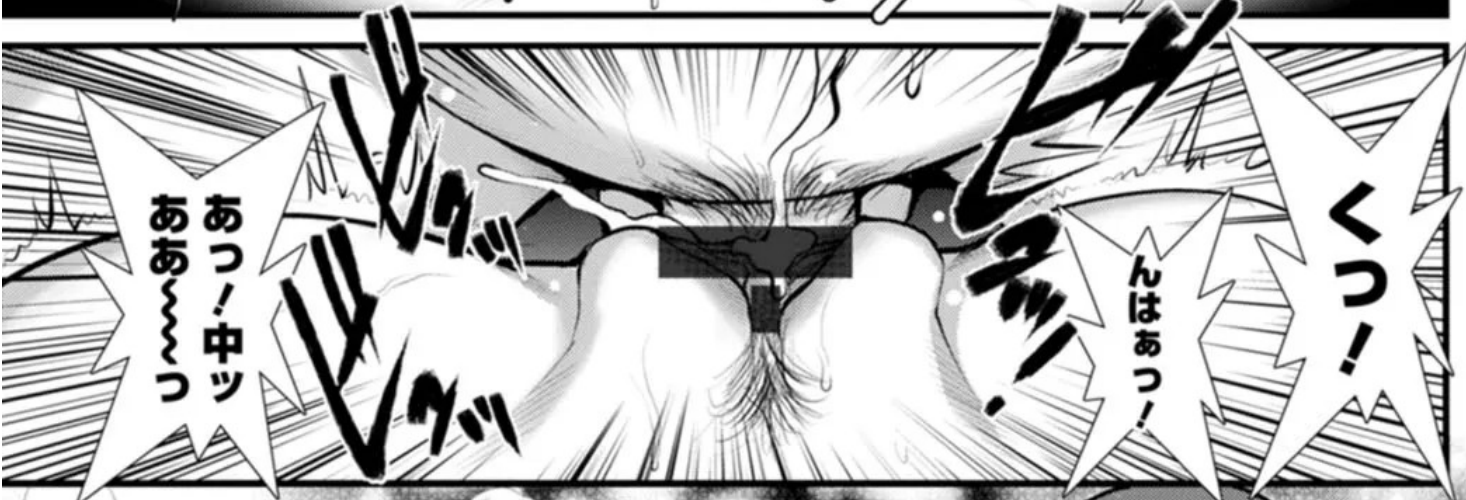
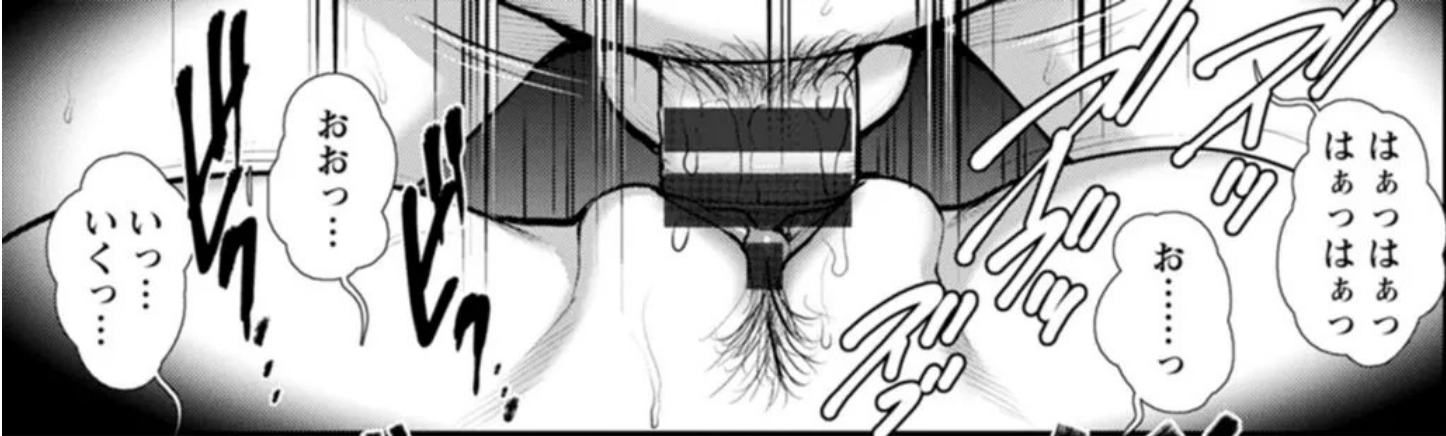


そんな下衆^{げす}で
くだらない
男の優越感を
感じつつも

頭には
次々と疑問が
浮かんでいく…

かつては
エリート女医
だった彼女を…

己の意のままに
犯している…





何気ない日常を送っていた俺の家に…

突如として現れた不気味な穴…

その穴は地下深くまで到り…

奇妙な地下道へと続いていた

地下30メートルはあろうかというその穴の底で…

イサカと名乗る少女に出会った…



俺は
その穴の
奥底で

医者と名乗る
もう一人の
女に出会う



かわにしあや
川西綾

この地下道の
秘密を知って
いるらしい



ああ…ッ

男なんて
久しぶり…

俺はその秘密と
引き換えに…

女と
肉体関係を
持った

彼女は
なぜ…

この地下道の
存在を知り…

イサカと
隠れ住む事
になったのか…

はあっはあっ
はあっ…

あ！…ッ
そこお…♡

ッ犯してッ
ンもつと…ッ
もつ…ッ！

出してッ
うウッ…

私の
中に…ッ

私が
女って…

お願い…

思い知ら
せてええ…

んっ！

はアッ！

あ…っ

ああ…

アタシ





顔にいつぱい
かけて…んっ
欲しいわ…

んっ…私…
にも…っ



ねえ…
出す？

出して
あげよう
か？

あ…
ああ…



…にも？

ふふ…
とぼけても
ダメよ

あの子にも
そうした
じゃない…



初対面の
慥貪な
態度とは
変わって…

どことなく
被虐的で

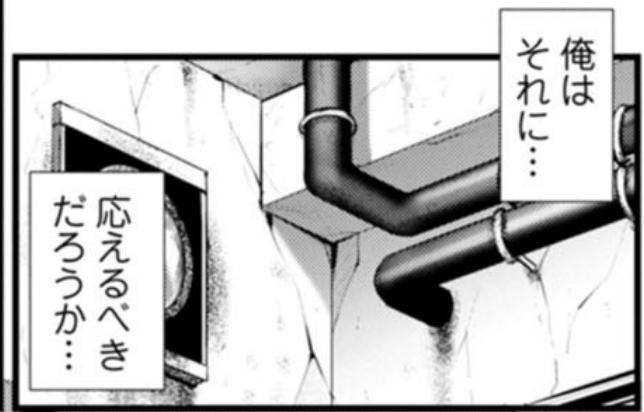
女である事を
楽しんでいる
ように見える



参ったな…

なんでも
お見通しって
わけか…

うふふ…





ああ…
はい…

じゃあ
髪あけて



欲しいか？

ああ…
みじめ…

欲しいっ
欲しいです…



ああ…
ああ…

出るのね…

はああ…
ああ…

ああ…
出そうだ…

大人しく
して…



ああっ…！

ああ…
精液…

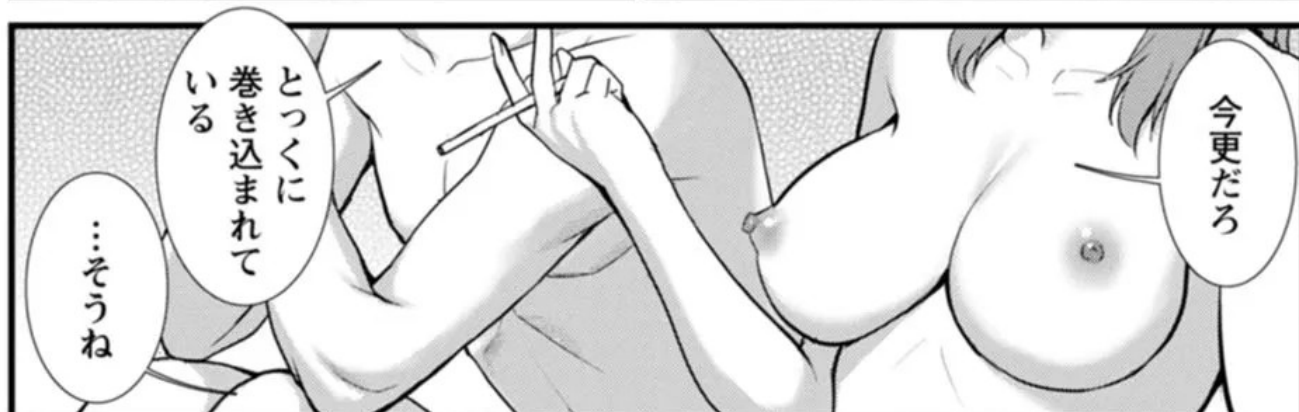
精液
出してええ
えっ

はあああ
はあ…

くっ…！
いっ…！

口開けて





あなたが
あの子と
出会った
あの広場

結局実戦で
使われることは
なかったけど
戦後もそのまま
取り壊されず

戦後の
地下鉄や
上下水道は

この地下道を
避けるように
作られていった

あれが
臨時総司令部
の跡地よ

…ずいぶん
詳しいな…

私の曾祖父が
建設に関わって
いたからね

城東区にある
あなたの家は
元は曾祖母の
持ち物なの

だから曾祖父は
密かに家族が
逃げ込めるよう

家と地下道を
繋げておいたと
いうわけ

なぜ戦後に
取り壊さな
かったんだ？

米軍の戦後統治
次第ではゲリラ戦
を始めるつもりで
秘匿されたのよ

例えば…

天皇の廃位を
目論んだ時
とかね…

幸い廃位もなく
戦後統治は終わり

昭和中期に
地下道の存在が
公表されたけど

それは表層の
ごく一部

そこには時々
東京都の職員が
状況確認に来る
けど…

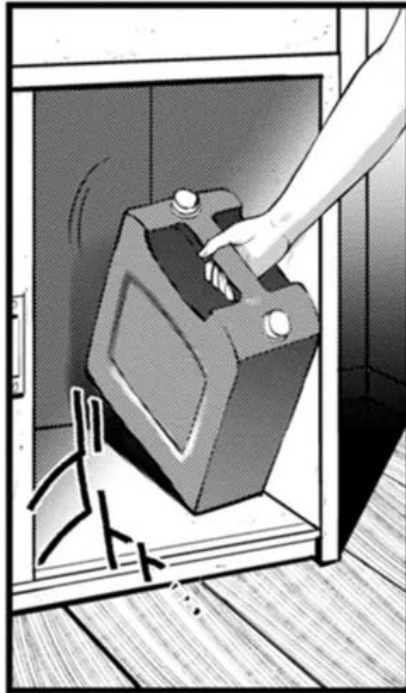
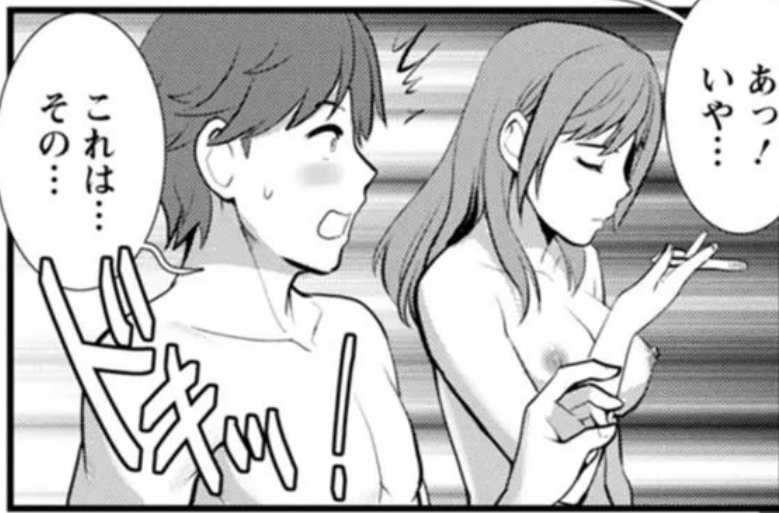
この病院や
イサカの部屋に
繋がる地下30mの
通路までは…

都は把握して
いないのよ

そうか…

とんだ場所に
迷い込んだ
ものだな…





イサカ…

怒ってる？

……？

何が？

い…いや…
俺と綾が
その…

別に…？

あの人…
好きじゃない
から…

そ…
そうなのか

愛らしく微笑む
花のような
彼女の笑顔に

なぜか俺は
言いようのない
戦慄を覚えた

この子に
とって
俺は…

一体
何なのだ…？

それだけで
幸せなの

私は誓が
セックスして
くれたら…

…だが

彼女の蠱惑的な
肌を前にすると

心の恐れすら
麻痺していく…

ひんやりと
して…

何の
匂いもしない
その肌に

俺はまた
のめり込んで
行く…

この小さな
秘裂に…

己の欲望を
ねじ込む
快感は…

堪えられ
ない…









イサカとの
蜜月は
続く…

この
地下30mの
世界で…

世間から
隔絶された







東京都
城東区

俺が暮らす
ごく普通の
下町だ

そこには
穏やかな
日常がある

だが…

その地下
30mの世界
には…

戦時中に
造られた

巨大な地下道が
広がっている

やはり電波が
届かないか…

地図の
自動作成は
無理だな

自力で地図を
作るしかない

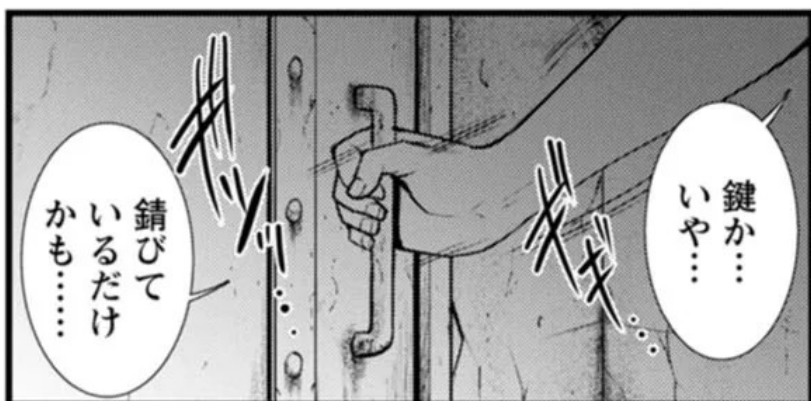
まずは…

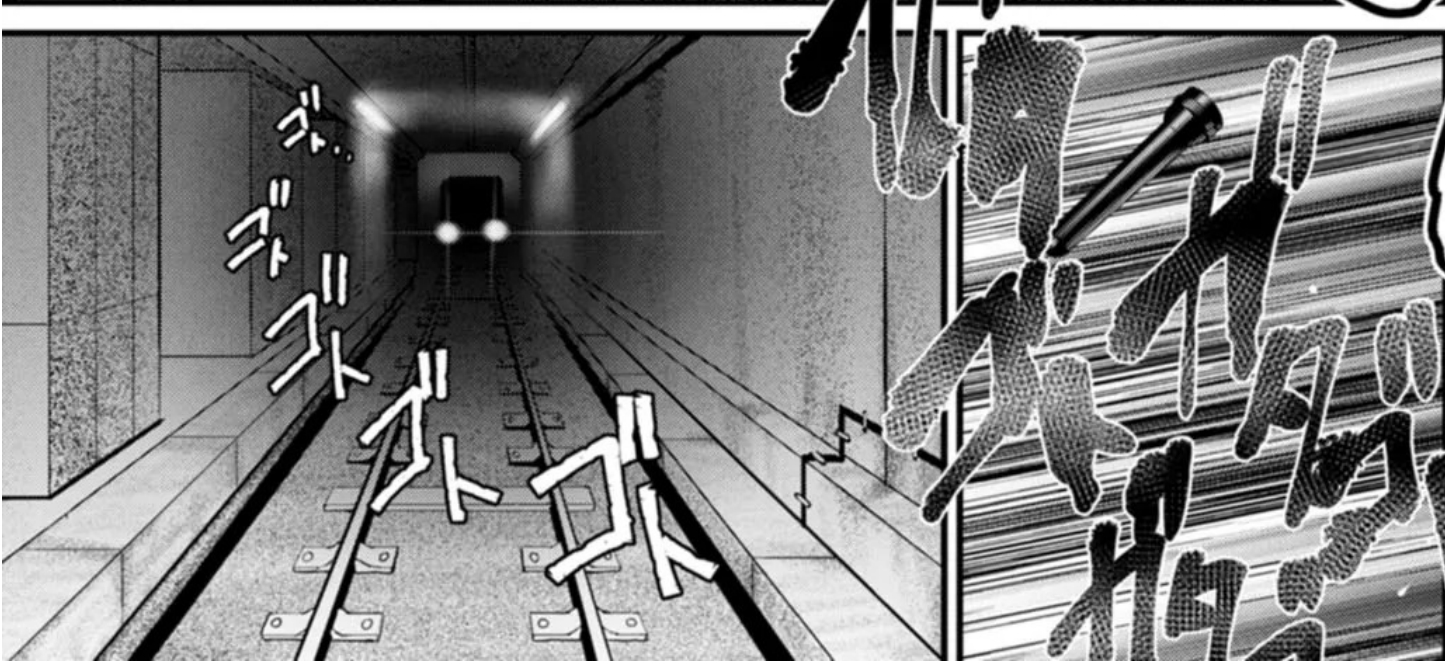
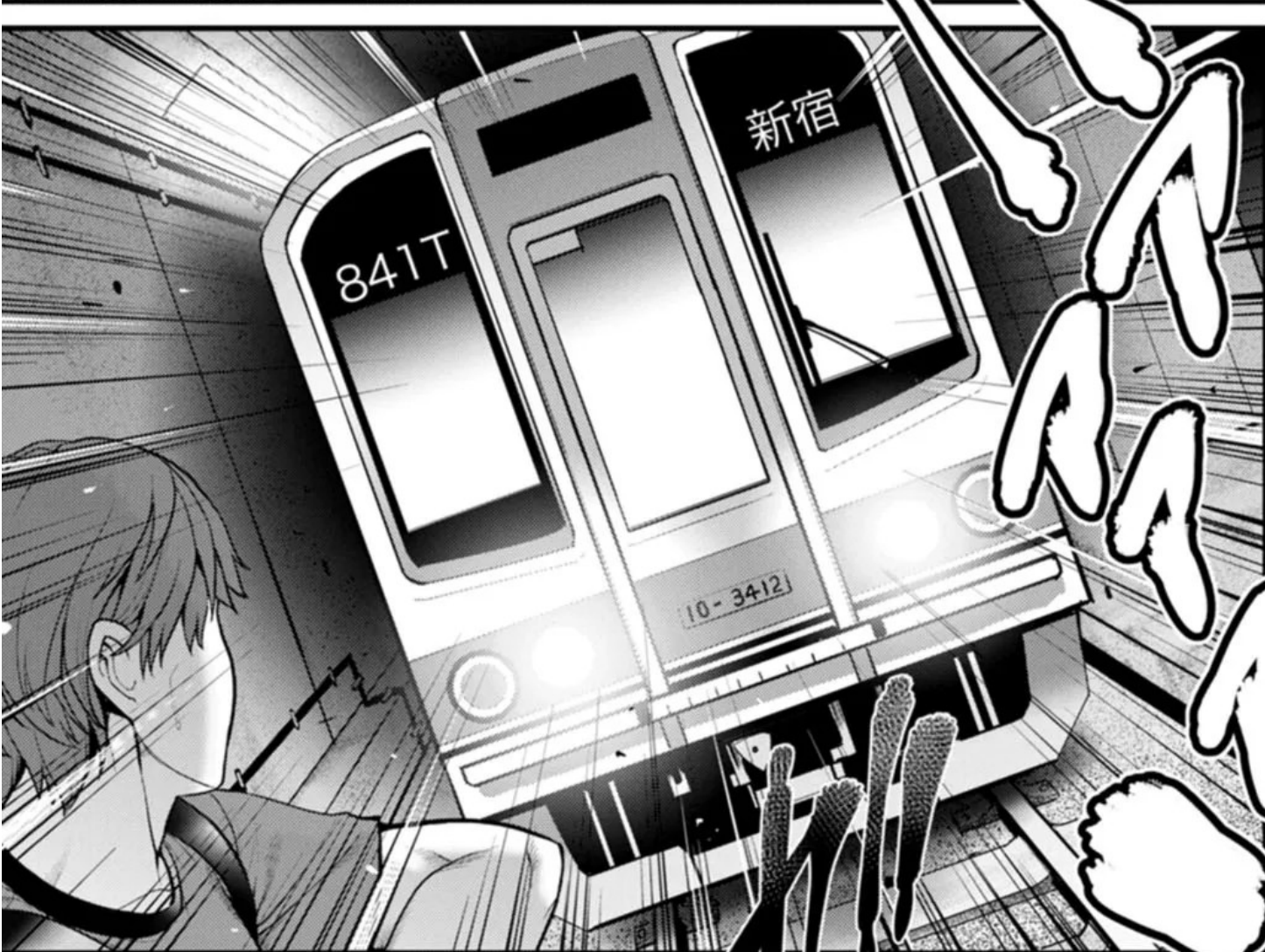
この辺から
埋めるか



ここで
終わりか…

だいぶ上まで
登ってきたな



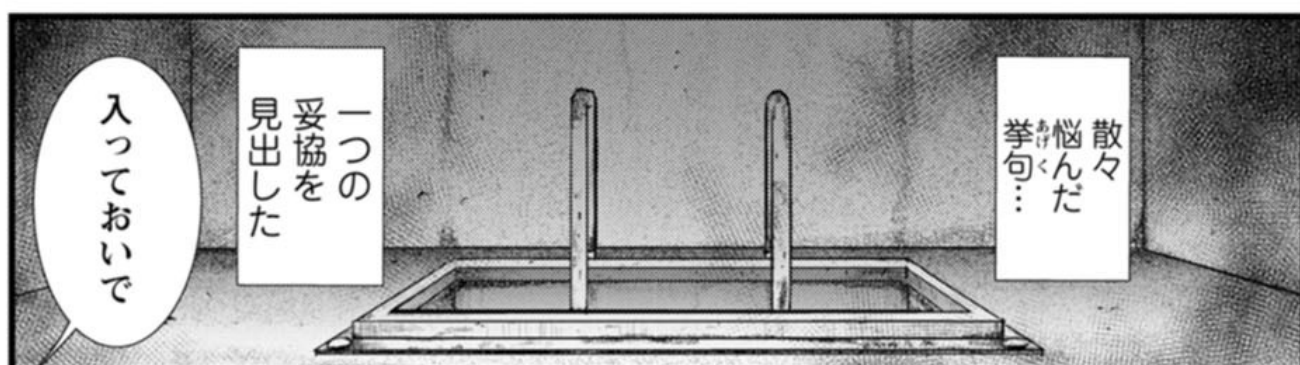


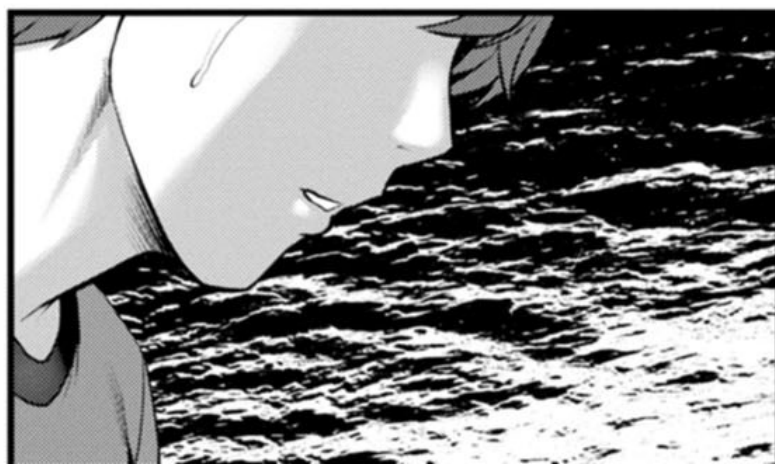


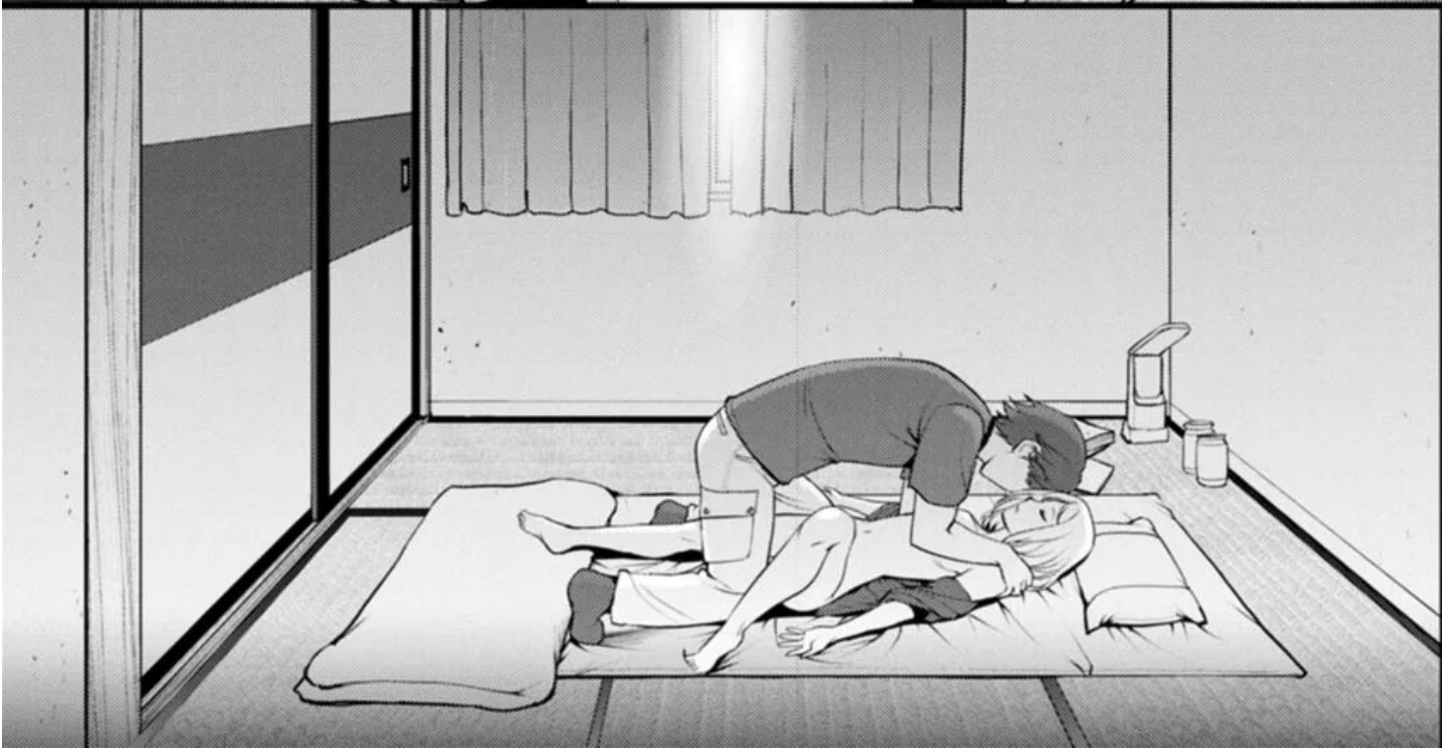
知ってたのか?
ここが地下鉄に繋がるって









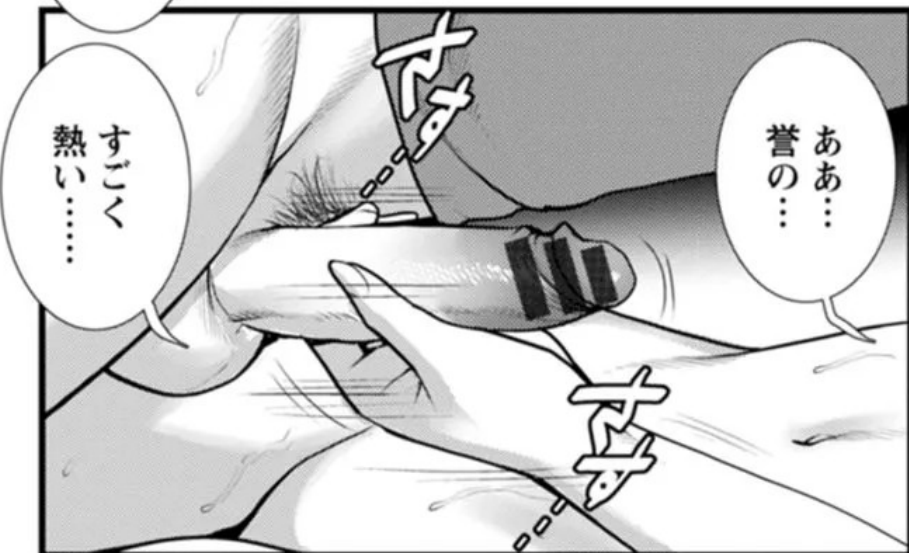




んっ
んっ

はあ…

ふっ…



ああ…
誉の…

すごく
熱い…



なぜか彼女を
見つめてしまうと

猛烈な性衝動が
体を突き抜ける…

そういえば
こんな明るい
場所での…

初めて
だよな…

ふふ…
私は…

誉となら
どこでも…

来て…

カーテンの薄明かりに
照らされた彼女の肌は
赤みを帯び

地下で見るより
艶^{なまよ}かしく

誉…

俺の劣情を
そそりたてるに
十分すぎた…

は…

んっ…

ああ…

レ…





見慣れた自室に
イサカがいるのを
見ていると...

彼女に現実感が
湧いてくる...



普通の男女
として睦み
合う事に...

嬉しさが
こみあげる



地下でも
感じた

あの奇妙な
感覚への
恐れも消え



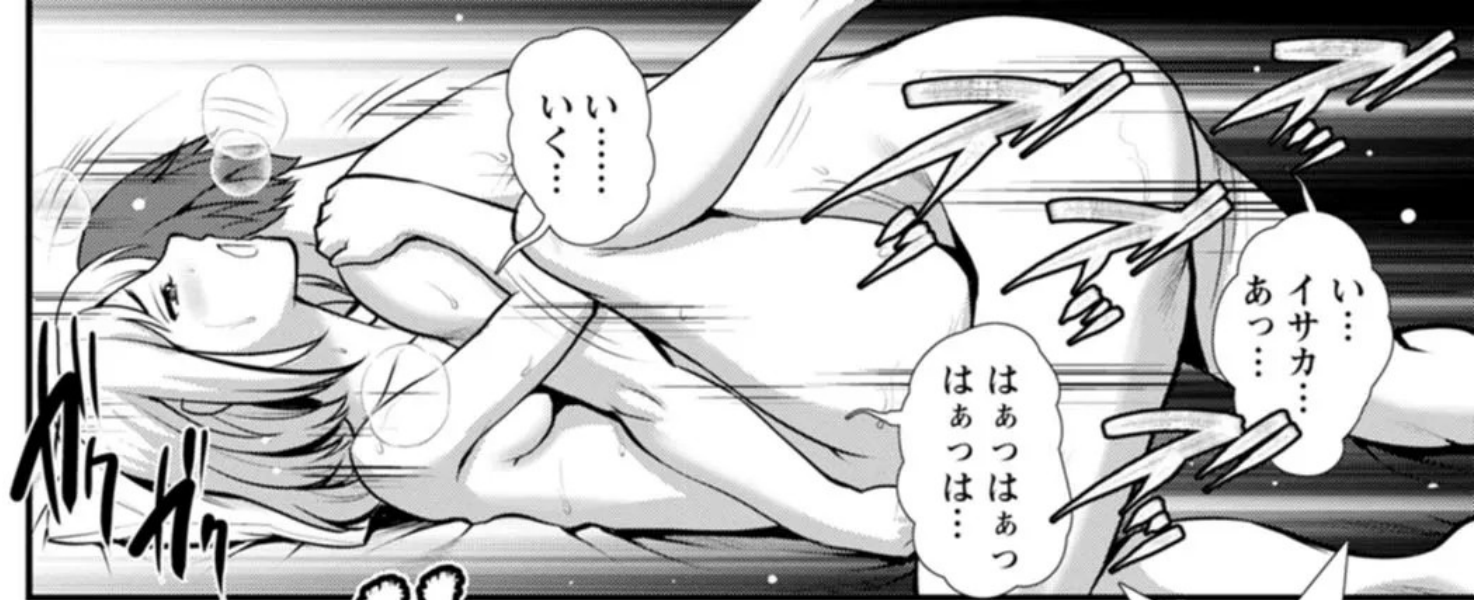
そこっ...

あつ...

誉っ...
いいっ...

あ...
ああ...
~~~~~









誉…

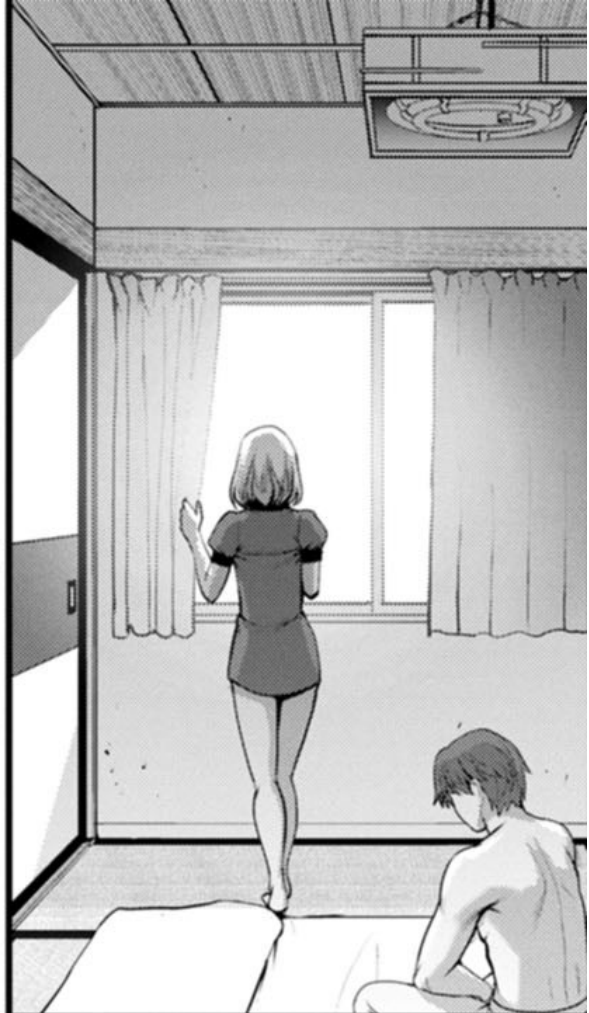
夕焼け  
ほら…

ん？



ああ…

もう  
夕方か…



東京に  
出て来て  
7年…

じつと夕焼けを  
眺めるなんて

初めてかも  
しれない…



日常に追われ  
続ける俺と…

非日常に隔離  
され続ける  
イサカ…

この出会いが  
意味するものは

一体なんなの  
だろう…

































…何かに  
追い詰められ

焦燥しきった  
綾の横顔を  
見て…

俺はそれ以上  
問うのを  
やめた…

やれやれ…

こんなところを  
素っ裸で歩く  
羽目になるとは…

助かるわ  
タンク持って  
もらえて

服は病院で  
乾かしましょ

水はそっちの  
物置にね

わかった

あとで  
水質検査  
するから…

綾は  
イサカの  
ために…

こんな面倒な  
生活を何年も  
続けてきた  
のか…

イサカに  
外を歩かせて  
やりたい…

だがそれは  
綾の今までの  
苦勞を台無しに  
してしまう…

どうしたら  
いいんだ…？







ああ…  
責めて…ッ

あっあっあ  
あっああ…



…ああっ…



欲しかっ…  
あ！…ああ…

えっ…ええ…  
あ…ああっ…

そんなに  
欲しかった  
のか…？

すごい  
濡れてる…



おっ！おおっ…  
あっおっおっ…

彼女の  
望むまま  
責め苛む

あ！ッ…う  
うっいつ…

様々な事情が  
頭の中で交錯し  
集中を欠いた  
まま…



彼女が医者とい  
うのは本当の  
ようだが…

獅子ヶ園  
病院…

名門だな



なぜ…  
ここまで

落ちぶれて  
しまったのか  
……？

穴蔵から続く  
この薄汚れた  
病院に閉じ  
こもり

女として  
衰えていく  
自分を嘆き  
ながら…



好きでもない  
俺に抱かれて…

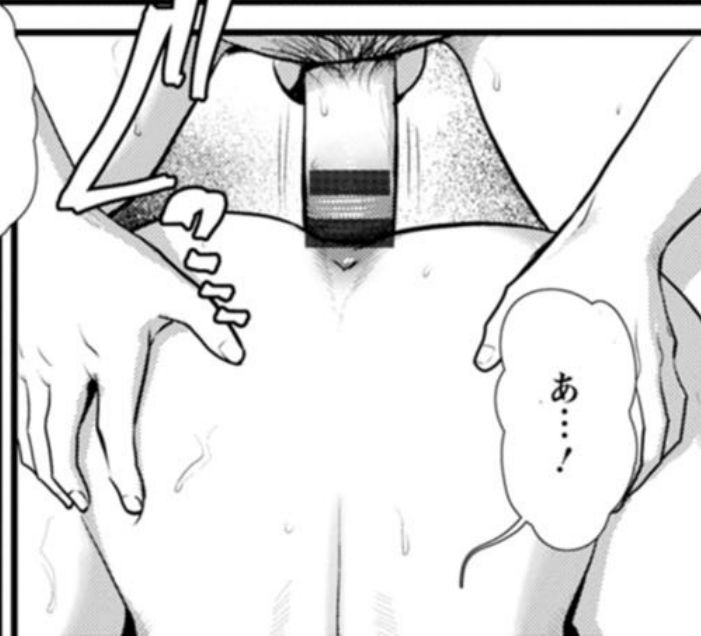
心の隙間を  
埋めている…

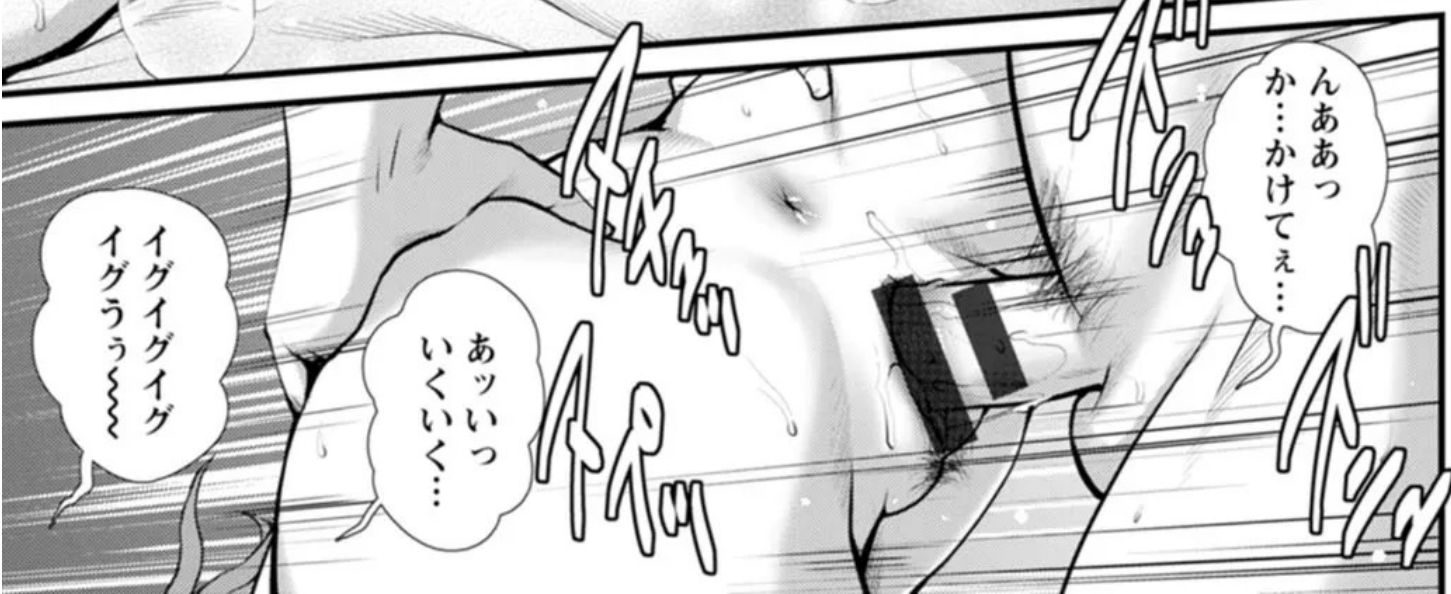
ああっ…  
ああ…ッ！

感じる  
そこっ…  
そこ…

ああ…  
そこっ  
もっとな















ですが  
富嶽幹事長は  
自本党のキング  
メーカー

既に次の総裁を  
ご自分でお決めに  
なってるのでは？

それは  
買いかぶり  
すぎですな

党において  
民主的手続きを  
行い決定する

これが  
我々自本党の  
基本方針です

…富嶽祥明  
ふがくよしあき

有名な  
政治家じゃ  
ないか…

……まさか

…落ち  
着いた  
か…？

イサカ

うん

君と綾は…  
あや

この男に  
追われている  
のか…？

………





富嶽という男に  
狙われている  
理由を

教えて  
くれないか？

君と  
イサカが



……そう

イサカから  
聞いたの

ああ



……それを  
知った所で……

あなたには  
どうする事も  
できないわ



なぜだ？

俺はそんなに  
信用できない  
か？



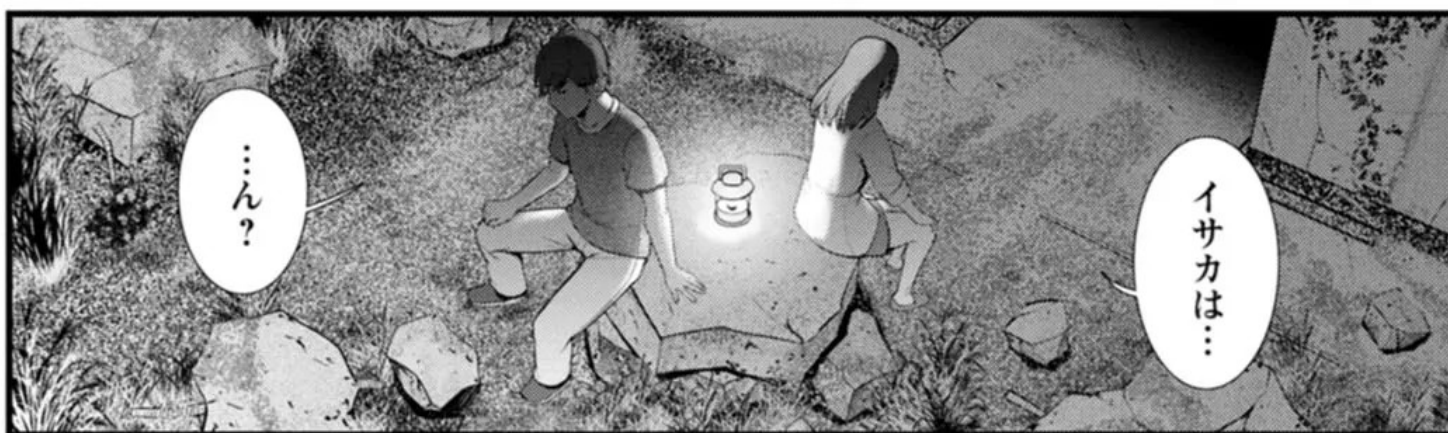
……違うわ……

ただ……

これ以上は  
あなたに……









体は痩せ細り  
全身アザだらけ

見るに耐えない  
状態だった

幸い命は  
とりとめた  
けど…

彼女には  
身寄りも  
なく

引き取り手も  
いなかった

それで綾が  
引き取った  
のか

ええ…

事情を聞くには  
時間が必要  
だった…

よく聞いて  
誉…

あの子は  
ある重要な  
秘密を知る

ラスト  
最後の  
サバイバル  
生き残り

富嶽は  
その秘密を  
狙っているの





それに  
イサカには  
戸籍もなく  
渡航記録もない

つまり…

法的に  
存在しない  
人間なの

なんだって？



だから  
誰も助けては  
くれない

それを  
悟った時

病院を辞めて  
イサカと地下に  
潜ったの……



綾…

イサカの  
握っている  
秘密とは

いったい  
何なんだ？



……？



…それは  
私もよく  
知らないの

イサカが  
話してくれ  
ないから…



わかった

とにかくよく  
話してくれた

ごめんなさい

こんな事に  
巻き込んで  
しまって…

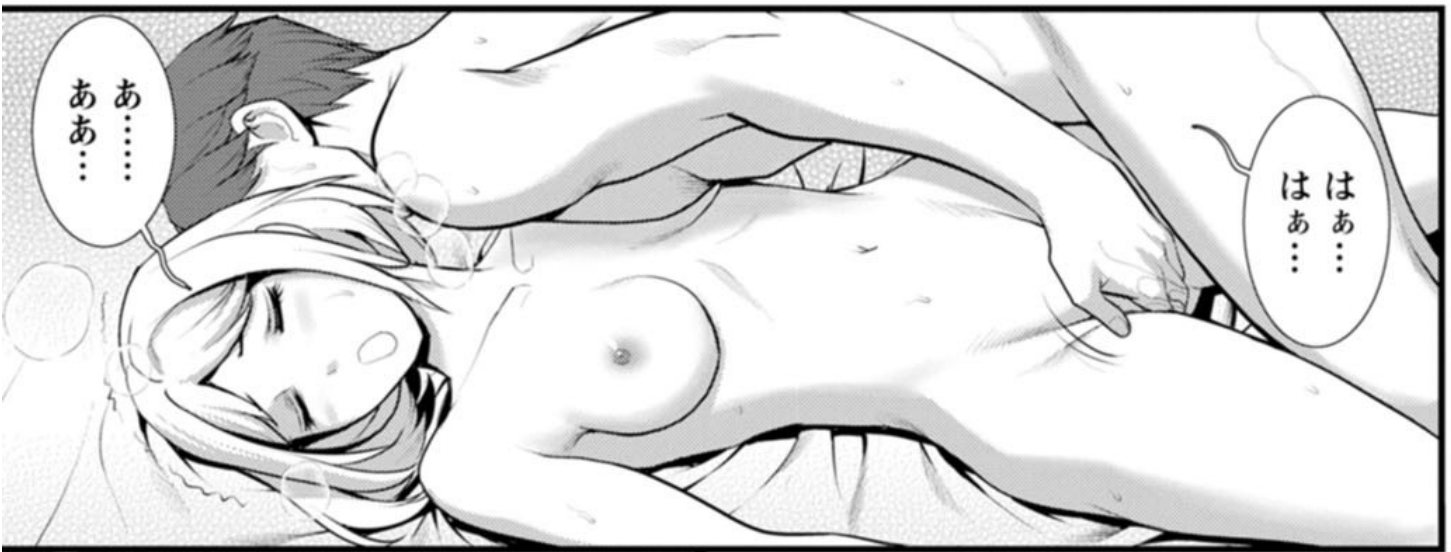




















肩の荷が  
下りた気分

今日は  
少しだけ



…久しぶりね

一人で  
こんなこと  
するのは…



ああ……

誉……

わかった  
よく話して  
くれた

心配いらない

綾もイサカも  
俺が守る



あの一言で…

私はどんなに  
救われたか…

ずっと一人で  
抱え込んで  
きたから…



なのに…  
今更…

私は  
若い頃から

男なんか  
に  
負けまいと…

肩肘張って  
生きてきた…



女である  
自分から  
逃れられない  
現実に気付く

なんて  
愚かなの…









こうして見る  
イサカは  
あどけなく…

幼い  
少女のように  
無抵抗で…

俺に体を  
委ねている  
のに……



イサカの  
性器は

俺の性器に  
執拗に  
絡みつき…

射精を  
促すように  
蠕動している…



ああ…  
イサカ…

君は  
いたい…

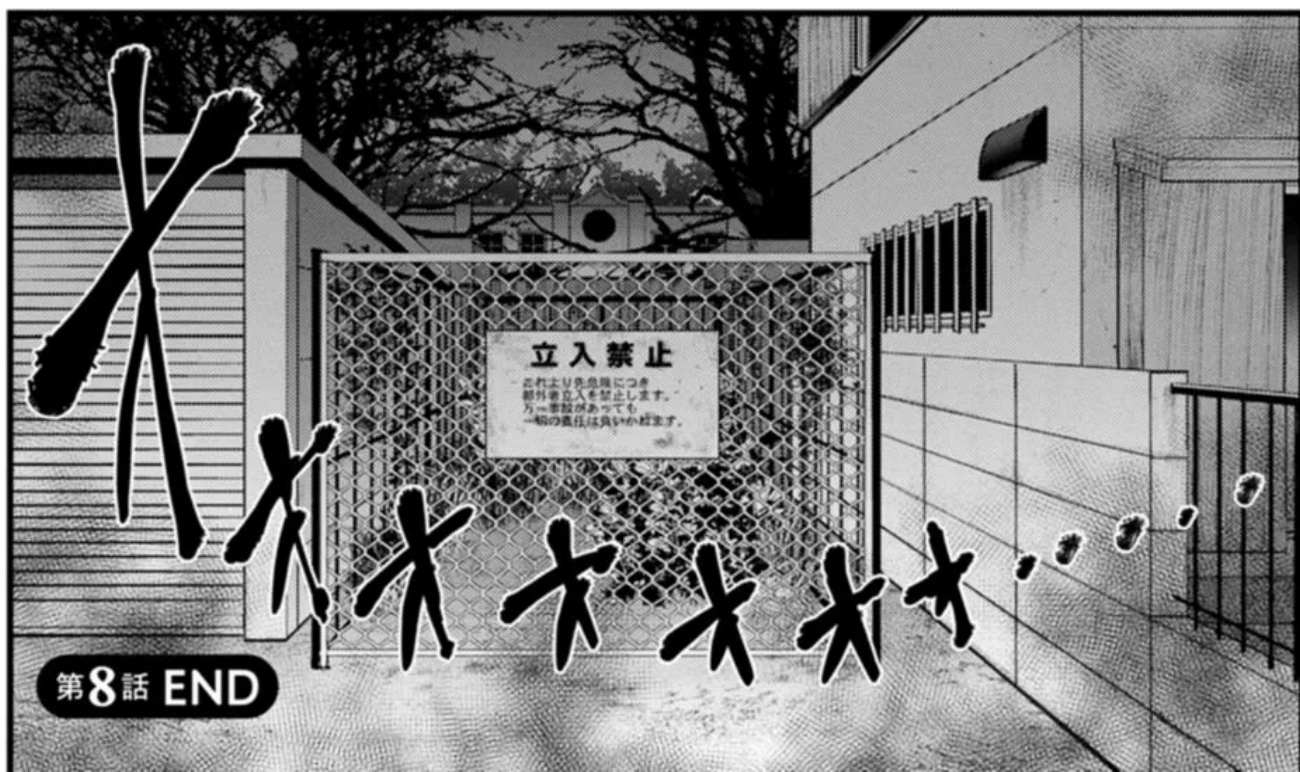
何者なんだ…  
イサカ…





ふーん











ああ……

お空……

行こう

うん



車が  
いっぱい…



わあ…



でもこの辺は  
ごちゃごちゃの  
住宅街

表通りは  
国道で  
排気ガス  
見所なんて  
ないけどな



まずは  
近場から

徐々に外に  
慣らして  
行こう

うん…



ううん…

そんなこと  
ないよ…

うれしい…

地下30mの世界に  
何年も閉じ込められて  
いたから…

こんなありふれた  
光景もきつと新鮮  
なんだろう…









我ら  
永遠の肉叢は  
宗教法人として  
認められている

信教の自由に  
介入しないで  
もらおうか

し…  
しかし  
ですね…

近隣住民  
から苦情が…

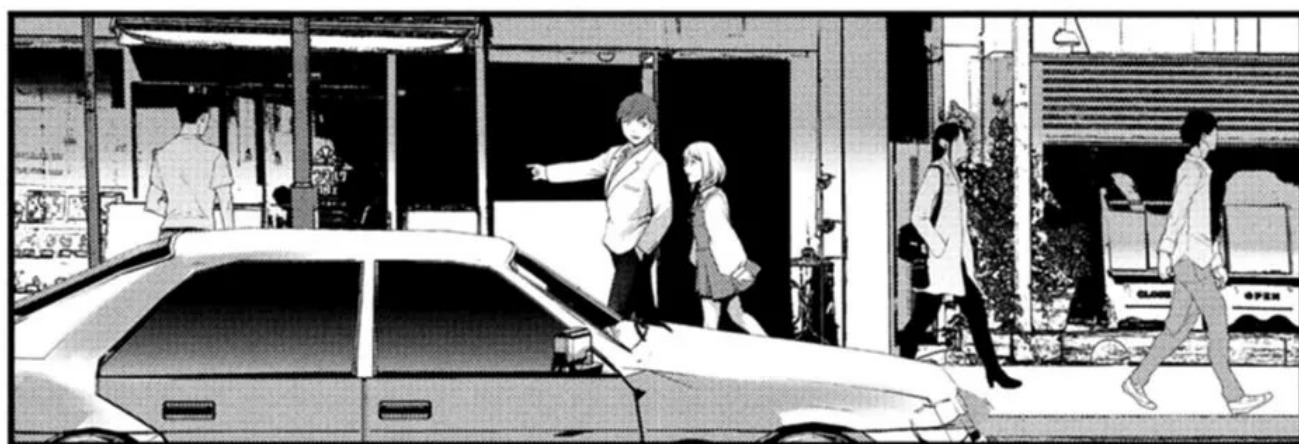


……?  
?









楽しかった  
か？

うん  
ありがとう

こうして  
いると…

普通の  
女の子  
なのに…

秘密を知って  
しまったばかりに  
不自由に…

警  
あそこ

あれ  
入って  
みたい

ん…？

げっ！

あ…あのな  
イサカ  
ここはな…

お城みたい  
入ろ入ろ

ホテル？

あれ？

んーと…  
ここって…

そ…  
そうだよ…











花のように  
可憐で愛らしく

大人しく  
従順で…

セックスに  
積極的…



だが今は  
わかる

秘密を抱え  
狙われ続ける  
人生の中で

身を隠す  
必要に  
迫られ…



男の勝手な  
理想を具現化  
したようで

俺は無邪気に  
喜んでいた  
だけだった



男に守って  
もらうために

従順に  
振舞うしか  
なかったの  
だろう…



それを  
思うと…

哀れで…

そして  
愛おしい

っあッ…  
あ…あッ

あッあッ  
あんッ…  
ああ…ン



一体  
何なのか

俺はこの子に  
とって…

それは何度も  
頭をよぎった

だが  
俺は…

この子を  
守りたい…

それだけを  
心に決めて  
いる…



そして  
イサカを

外の世界に  
出してやりたい

俺の願いは  
それだけだ

ああ……

誉……

幸せ……











いい加減に  
して！

そんなに  
私の秘密が  
知りたいの？

そうすれば  
あなたも  
終わり

秘密は  
永久に  
失われる

人を  
殺してまで

それなら…

誉を殺したら  
私も死ぬ

私が持つ  
秘密の  
せいで

今までこんな  
醜い争いを  
何度も見てきた

そしてみんな  
いなくなった…

もう  
たくさんよ





綾……

い  
ふ  
……



……行って……



バカね……

譽を  
殺すなんて

できないくせに



破滅の時が  
くる……

そして……

この地下道も……





【初出】アクションビザッツ 2020年5月号～2021年1月号

## 【著者解説】

閉鎖的な故郷を嫌厭し、九州の片田舎から上京した普通の青年、中島譽。

その平凡な暮らしに突如現れた地下30mに続く地下道への穴。漆黒の地の底で、不思議な少女イサカと出会う。

「ある秘密」を持つ少女はそれを求める者達に追われ、女医、川西綾と共に地下道に隠れ住んでいた。

だが譽が関わった事で二人の運命は狂い出す。

女医の不審な態度  
有力政治家の関与  
謎の宗教団体

少女イサカの持つ「秘密」を求める者達が闇夜の蟲の如く蠢動する  
(次巻に続く)







## カバー折返し・1



## カバー・表





## カバー・裏＋背表紙





## カバー折返し・2



## 表紙・表





## 表紙・裏







エンジェルコミックス

ち か さんじゅうメートル みつげつ  
**地下30mの蜜月を…**

2021年2月17日 第1刷発行

著者◎<sup>さい が どう</sup>彩画堂

発行者◎庄盛克也

印刷所◎凸版印刷株式会社

発行所◎株式会社エンジェル出版

〒162-0813 東京都新宿区東五軒町3-28

[営業]03-5261-4860

[編集]03-5261-4846

装幀◎VOLARE inc.

装画◎彩画堂

編集協力◎RPGカンパニー2

落丁・乱丁の場合は本社にてお取り替えいたします。

●定価はカバーに表示してあります。

本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製・転載は著作権法上での例外を除き禁じられています。本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは、たとえ個人や家庭内での利用でも著作権法違反です。

©Saigado 2020 Printed in Japan.

ISBN978-4-87306-938-8 C9979

◆この作品はフィクションです。登場人物・団体等はすべて実在のものとは関係ありません。